



Title	両大戦間期における一社会学者の軌跡(Ⅱ) : ジョルジュ・フリードマンの労働社会学の成立をめぐって
Author(s)	杉山, 光信
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1982, 8, p. 289-327
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7451
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

両大戦間期における一社会学者の軌跡(Ⅱ)

——ジョルジュ・フリードマンの労働社会学の成立をめぐって——

杉 山 光 信

目 次

1. はじめに
2. 合理化とフランスの社会主義者
3. 最初のソヴィエト滞在(以上第5巻)
4. フリードマンのテイラー主義分析
5. 『聖なるロシアからソヴィエトへ』をめぐって
6. 労働社会学の体系化(以上本巻)

両大戦間期における一社会学者の軌跡(Ⅱ)

——ジョルジュ・フリードマンの労働社会学の成立をめぐる——

4. フリードマンのテイラー主義分析

フリードマンの『進歩の危機』があらわれるのは一九三六年のことであり、それから今日までのあいだには半世紀のへだたりがある。フリードマンがこの著作のなかで行っているテイラー主義分析をみていくにあたっては、この半世紀のへだたりを念頭におく必要があるだろう。この期間に、テイラー主義をとりあげ、問題とする仕方そのものがかなり変化しているからだ。

今日のフランスの社会学者たちは、西ヨーロッパ諸国の現代化された工場において、ベルト・コンベアで結ばれた流れ作業工程をもつ工場や合理化された工場において、欠勤や職者をすぐに離れて移動していく現象 (turn over) がきわめて頻般になっており、その結果、企業が正常な生産の水準を維持しつづけるにあたって不安を抱かざるをえなくなっていることに、注目をむけている。「テイラー・システム的な労働組織をもつ工場では、そこで労働者がたずさわる断片化された反復的な作業にたいして、労働者はあからさまな無関心な態度を示し、労働とサービスの質の低下に悩まされている」⁴⁸⁾。だが、問題はそれだけにとどまらないのである。かつて一部の社会学者たちの論じた「新しい労働者階級」の主張とはことになって、一九六八年五・六月のフランスでの大規模なストライキ、あるいはそれ以後に生じている激しく長期にわたる労働と産業の紛争を生じさせているのは、自動車工場の単調さ、広大な売場面積をもつ商業部門、あるいは新しい情報処理方式を導入した銀行などの部門である。すなわち、テイラー・システム化された労働組織と管理方式のもとで労働者が「奴隷的な条件」に縛りつけられているということが、今日の西ヨーロッパ諸国の激しい労働紛争のもとで共通にみられる性格なのである。その結果、テイラー・システムをさらに近代的な技術と結びつけることで進められている合理化のもとでの産業労働の条件が「社会問題」と化しているのである⁴⁹⁾。

合理化が産業のうちに浸透したことで、労働組合運動の性格まで変化していったことには、ここでふれないことにしよう。しかし、テイラー・システム的な労働の科学的な組織化が現代化にとってひとつの必然であると思われている一方で、これにたいする嫌悪と抵抗が今日ひろまっていることにはふれないわけにはいかない。「科学的労働組織への抵抗の動きは、

権威やヒエラルヒーの異議申立てと重なっている。若い労働者たちはベルト・コンベア作業をうけいれないと同様に、企業の権威的な規律をうけいれない。反抗と異議申立てとは作業場と事務所での緊張を高めているだけではない。産業労働そのものにたいする青年たちの冷淡さ、愛着のなさの原因となっている。そして、いまや経営者たちは合理化されたベルト・コンベア作業につくことをうけいれる労働者をみいだせなくなるのではないかと恐れている⁵⁰⁾。このことは、たとえば今日のフランス失業者が一五〇万から二〇〇万人に達している一方で、それとほぼ同数の移入労働者が存在していることを想起すればよい。フランスの青年たちが拒否する自動車工場や土木工事にこれら移入労働者は入っていき、フランスで製造される自動車のうち三台に一台はかれらの手になるほどなのだ⁵¹⁾。こうして、今日ではテイラー・システムの合理化が産業において成功をみたゆえに、企業そのものの機能が停止せられかねないという危機を招いてしまっている。

このことをふまえて、R.リナールは「テイラー・システムは現在では、資本主義の視点からさえみても失敗であったことが明らかになっている」⁵²⁾と述べている。さきに十九世紀の工場立法の制定を求める労働者の運動が、「労働日」をめぐる労働者と資本家の対決が、マルクスのいういみでの絶対的剰余価値の生産の論理から相対的剰余価値の生産の論理への移行を促したといったし、またこれにたいして、テイラー・システムの登場はそれにたいする反革命ともいえるものであることも指摘しておいた。今日の西ヨーロッパの諸国においては、R.リナールのいうように「経営者たちはあるいみでテイラー主義からの撤退しようとしている」⁵³⁾といえるかどうかはともかく、第三の段階に達したのだといえよう。具体的にいうなら、タヴィストック学派の提唱にはじまる「職務の拡大」、スカンジナビア・モデルなどの新しい労働組織がテイラー主義の危機という事態にさいして、実験されるに至っているのである。

今日、社会学者たちがテイラー・システムを考え論じるときの見方や問題意識はこのようなものであるから、フリードマンの『進歩の危機』のテイラー主義分析の視点とは必ずしも同じではない。だが同じでないということでは、前章でみたように、テイラーの著作をレーニンがどのように読んだかをここで想起しておくことも意味のないことではないであろう。今日、テイラーの著作を読む人はすべてテイラー主義の危機という問題意識に立っているから、そこに「ベルト・コンベア・システムとそのための労働の細分化を極限まで進めた」ことを読みとる。たしかにこのことは書かれているけれどレーニンが読みとったことは、それではない。自然の状態におかれるなら労働者は生理的により高くまた機械の性能とみあった能率のレベルよりも、低い水準でしか働かない。より高い能率のレベルにひきあげるには新しい労働組織を導入し押しつけることしかない、ということであった。近代的な労働者はごく少数しか形成されていない遅れたロシアの低い生産性、これを一挙にひきあげる手段と

してレーニンに構想されたのがテイラー・システムであったのだ。今日のフランスの社会学者の見方と、レーニンのテイラー主義の見方と、その二つの視点の交錯するところに、G. フリードマンは位置しているとでもいえようか。レーニンなきあと、一九二〇年代の後半からソヴィエトで論じられるようになるポリテクニズムの思想がフリードマンの思想を考へるばあいのカギである。テイラーとフォードの構想した新しい労働組織がソヴィエトの社会体制のうちでこそ完全な形で採用されうるのであるとしても、資本主義諸国でのその採用・展開のうちにはポリテクニズムの人間の形成はみられるのか、あるいはみられないのか。フリードマンにはこのような問題関心がある。

だから、テイラーが労働作業の動作分析、ストップウォッチによる動作時間の測定、作業の分割を進めたことなどが、分業を過度にまで進め、人間の労働を反復的で単純なロボット的作業にしてしまったと否定されてしまうのではない。また、テイラーは労働作業を分割し、フォードがベルト・コンベアでそれを結びつけることで流れ作業、半自動化された流れ作業と大量生産の方式が生れたということをG. フリードマンは論じようとしているのでもない。フリードマンのテイラー主義分析を独自のものにしているのは「労働する人間」(l'homme au travail) の統一性への関心である。つまり、テイラー主義以前の段階の職人的熟練労働者の行う作業を考えてみるなら、そこでは労働の手段をもち、機械と材料について精通し、自分で作業の段取りを決めすべてひとりで行うもの(フリードマンが travail à l'unité といっているもの)であろう。『進歩の危機』でのフリードマンはテイラー化が進められていくあとでも、あらたな形でこの travail à l'unité が生み出されうると考えている。ポリテクニク的な新しい労働者イメージにおいて考えられているものはこれである。

『進歩の危機』において、テイラーの思想は三つの側面から、すなわち、技術的側面、心理的側面、経済・社会的側面において、それぞれ分析され検討される。このアプローチの仕方のうちに、のちの『産業機械化における人間の問題』での体系の構成の萌芽をみることもしよう。しかし、あとの著作で産業労働を三つの段階で検討するばあい、その各々において扱われている内容と、『進歩の危機』で三つの側面で各々検討されている内容とは同じではない。『人間の問題』では、産業労働における人間的要素を生理学的研究ではとらえきれず、その研究は心理学のレベルに移行したところで続けられること、しかし心理学的研究でもとらえきれず、その研究は社会学のレベルで進めることが必要になっていくという論理を軸に展開されていた。だが『進歩の危機』で技術的側面としていわれることは、テイラーの one best way の観念と思考と実行との分離であるし、心理学的側面として語られることはテイラーがそのシステムを労働者にうけいれさせようとして考えていた心理学的なストラテジーの分析なのである。ともかく、フリードマンのテイラー主義分析をみていこう。

よく知られているように、機械技師であったフレデリック・ウィンスロ・テイラーが、その名を冠せられる労働組織を構想するのはミッドヴェル製鋼会社の工場での体験からである。職工長に指名されたテイラーは、その工場の労働者が「各々の機械が理論上発揮しうる能率」の $\frac{1}{10}$ にあたる能率しか働いていず、その作業のリズムを決して変えようとしなかったことを知った。「つねに精神の緊張を保ち 緩めることを知らぬ人物であり、いつでも指示されたことをこえてその先まで到達しようと努める」テイラーは、機械の設計上の能力とみあった速度と能率で労働者を作業させようとした。こうしてテイラーは三年間にわたって工場の労働者と紛争関係に入っていく、かれの指示に従わない労働者を工場から追放する。テイラーには、従来の労働者たちの能率は不正なものであると思えたのだ。だが、従来の労働者たちの作業能率は不正なものであったのかどうか。ここには、なにが作業能率の基準を決定するかという問題が含まれている。しかし、テイラーにはそれは自明である。科学的な知識をもつ技術者が決定するのだ（そのばあいにも技術者をこえて社会経済的な要因が作要しているのではないかとはいえない）。そう考えるのは、かれがミッドヴェル社の工場でこれに先立ち行っていた金属切削にかんする実験にもとづいている。そこで金属を削る工作機械の条件（形状、速度、材質など）について数年にわたる実験が続けられた。諸々の変数を確定し、方程式を立て解くことからひき出された結論は、旋盤工たちがそれまで経験的にもっともよいとしていたものとは全くちがっていたのだ。それゆえ、労働作業にかんする最良の能率も機械についてのそれと同じく、労働者の経験からではなく、技術者が科学的方法によって分析することで得られるのだというテイラーの信念が生れるのである。この信念に従い、かれの指示する速度と能率に従わない労働者たちを工場から追ったのである。

だが、それだけにとどまらない。作業能率は労働者の動作と速度とにかかわるわけだから、テイラーは労働作業の動作を要素的な部分に分解し、その各々に要する時間をストップウォッチで測定したのである。このことは工場の労働のみでなく事務労働にまで拡大された。そしてこの方法によって労働者にただひとつで最良の動作モデルと所要時間とが指示されたのである。

しかし、テイラーのいう「科学的方法」に従うだけでこのような「基準」が、one best way がひき出せるであろうか。それが可能であるとテイラーに思えたとしたら、それはテイラーが意識することなくひとつのことを前提していたからであると、フリードマンは考える。「ある機械にある 道具を装着するのと同じように、ある機械に就く人間を同じように規格化され、標準化された動作を行うものとしている。つまり、ここでは労働する人間は旋盤の上で回転している金属片と全く同じ性格のものとして、個人的な差異をもたぬものとされている」⁵⁴⁾。テイラーの one best way の観念についていえば、労働作業の動作をこえて、厳密な法則を基礎とする組織の科学が存在するとテイラーは考えている。それはもっと広く

テクノクラシーの思想へと通じているものであろう。じじつ、フリードマンはのちにテイラーを批判したのと同じ論理でテクノクラシーを批判しているし、組織において one best way が存在しないことはさらに後にM.クロジエが論じることになる⁵⁵⁾。

機械と労働者とのあいだで、「より早い速度とより正確に作業を行うように機械と道具を調整すること」の一部として、テイラーは労働の動作の分析を行った。すなわち、作業は要素的な動作に分解され、要素ごとに時間が測定され、分類され、ついで機械を能率よく運転するにあたって不要な動作がとり除かれる。だが、人間身体の運動をこのように「有用な動作」と「不要な動作」に分けることができるのであろうか。このことは『人間の問題』で具体的に批判されることになる。テイラーにより「無駄に費されている時間」(temps mort)とされたものこそ人間の身体にとって緊張の緩和に役立っているものに他ならないと、フリードマンはいうのだ。テイラー・システムが労働者=機械という複合体のうち、人間身体の個有な性質についての視点を有していないことをフリードマンは剔抉している。

「科学的方法」が労働作業の動作を決定し、能率の基準を決定するというテイラーの主張はさらに重大な問題を含んでいる。第2章でもふれておいたが、それは「思考する人間」と「労働する人間」とを完全に分割してしまうからである。だが、あくことなく能率を求めるテイラーにとってそれはどれほどのことであろうか。かれの構想は企業そのものの構造についても、営業、計理、企画、研究という4部門に機能を分割し、その最後の部門に「実験および技術的教養のすべて、労働について指示をあたえる思考すべて」を閉じておこうというものである。

もしこのような構想が完全に実施されたら、このシステムは労働者をロボットのような思考することのない自動機械と化してしまうであろう。じじつこの章の冒頭で示した今日の西ヨーロッパ諸国にみられる「テイラー主義の危機」はそのことゆえに生じてきている。だがテイラーは決してそうだとは考えない。かれはこのシステムにおいても分業の一般的な方法が徹底して実行されるにすぎないと思っている。そのことはテイラーが示している奇妙な例のうちにうかがわれよう。「完成された道具と専門的な知識とをその先生からうけとる若い医学生には独自の発見など可能であろうか……労働者がかれに先立って得られた技術・情報の支援をうるのは当然のことである」⁵⁶⁾。それゆえ、研究部門が用意する作業カードの指示に従う労働者は、「問題をすべてひとりで背負いこみ、ひとりで解決するばあいよりも、はるかによい条件を利用することができる」⁵⁷⁾。本当にそうだろうか。これは巧みなレトリックであるにすぎないのではないか。外科医と医学生とはその研究・訓練において同一の技術的教養のうちにいる。そこでは思考と実行とは分離されてはいないから、同じ知識や技術の水準に達することができる。テイラー・システム化された工場の労働者について同じことをいえるためには、研究部門の用意する作業カードが本当の意味で生きたものになるような技

術的教養へ労働者すべてが高まる機会をもっていなければなるまい。しかし、フリードマンのみるところ、かれが1930年代の初めにみたソヴィエトをのぞいて、西欧の資本主義国のどこにもこのような機会は存在していない。テイラーが完全に無視していることは、思考と実行の分離が社会階級の存在と重なっている事実である。その事実においてこそ、各人が社会的労働の各々の部署での仕事・職務をいつでも交換しうるような社会になるか、あるいは逆にひとつの仕事・職業に完全に固定される社会になるか分岐してくることになる。フリードマンはソヴィエトと西欧の資本主義諸国との対照を考えていたのである。

だが、対照ということでは、作業現場の様相と労働者の表情とはもっとはっきりと事実を語っている。1930年代初めのソヴィエトでフリードマンがみたものについては第3章でふれたが、これにたいしテイラー主義の導入された西欧の資本主義諸国の工場で見られるのは、思考を求められなくなった労働者が「創意の感覚」、「ものを完成させることへの趣味」などを失っている状況である。これらの感覚や趣味はフリードマンがリュシアン・フェヴルらと共有しているユマニズム的な人間観にとって、決定的な資質なのである。フリードマンによるならこれらの感覚や趣味を回復させるには、労働者をその作業過程の改革や、工場全体の編成の決定に参加させることしかない。そうしないで科学的労働組織を「外から」労働者に押しつけるなら、テイラーの行っているような無理な説得を行うしかないのである。この問題もまた労働作業における基準の問題とともに『産業機械化における人間の問題』であらためてとりあげられることになる。テイラー主義分析のうち技術的側面として論じられていることはこのようである。

テイラー主義が機械と労働力の合理的な利用をめざす技術であり方法であるとしても、能率の増大をめざすとしても、労働者たちがこのシステムをうけいれるのでないなら、なんの役にも立たないであろう。そこでテイラーは労働者の能率増大の動機づけの研究を行っている。それはミッドヴェル社の工場で作業の速度と能率をめぐる労働者と紛争に入った経験とかかわっているにちがいない。それゆえ、かれのシステムを労働者にうけいれさせるストラテジーを立てるために、心理学の領域にもかれの「科学的方法」がもちこまれる。

この領域でとらえられるはずの「法則」についてのテイラーの記述は漠然としているが、この「法則」を適用して行おうとしたねらいははっきりしている。先ず第一に、それは個々の労働者ごとにその仕事 (tâche) の能率や作業量を算出することである。おそらく当時はミッドヴェル社の工場だけでなく、一般にそのことは行われていなかったであろう。個々の労働者ごとに一時間あるいは一日につきなされるべき作業量、生産すべき部品の個数を定める。こうすることで個々の労働者の利益と願望を刺激することができるとテイラーはいう。そして、ある高さの率で設定される出来高賃金体系 (prime système) の導入を提唱す

るのである。だが、それは裏がえしていえば、それまで工場の労働者のもとみられた集団的な連帯感を分断することであるし、労働者がその要求を集団的なものとして行う基礎を解体することである。もちろん、テイラーはそれに気づいていないわけではない。むしろそれゆえに有利であるという。「詳細な分析は チームを組んで行われる作業において、個人ごととその願望が刺激されるときよりも、少い仕事しか行わないことを示した。能率はさまざまな程度に低下し、もっとも劣弱な労働者の水準以下にさえ低下する」⁵⁸⁾。しかし、後にみるホーソン実験はこれと反対の結論を出すことになるのだから、これはテイラーの選択を示すものでしかない。フリードマンの突くのもその点である。テイラーが集団的な刺激よりも個人的刺激の方が有利というとき、かれの視野はどこまでひらけていたのだろうか。「資本の利潤システムに従って搾取されている工場のうちでは、労働者の作業チームごとに競争心が作用しないことにはなんの不思議もない」⁵⁹⁾。ここでも 1932 年以来、かれのみたソヴィエトの工場の様子が暗黙のうちに想定されている。フリードマンからみれば、テイラーは協調主義や利益への参加など他の集団的な形態の刺激の可能性を 始めから 認めていない。「個人的願望の充足こそ、普遍的福祉の実現の希望よりも、比較にならぬほど強力な刺激であったし、これからもそうである」⁶⁰⁾。いついかなる状況でもそうだという立場を「科学的方法」の名のもとで押しつけているにすぎないのである。

さて、このように労働者のもとに個人的な動機しか認めないばあいには、どういうストラテジーが展開されていくのか。巨大な産業工場にいて作業チームに編成されている労働者大衆の連帯を、仕事 (tâche) の範囲を画し個人ごとに能率の基準を定めることで解体し、ひとりひとりについて願望を刺激すること、かってひとつの全体をなしていた作業を断片化し、メカニックなものにすること、これである。すなわち、各人は 1 時間に 50 個の継環を削るとか、30 分間に 2 本のシリンダーをくりぬくとか仕事が固定されるのだ。いうまでもなくそのねらいは「労働者を同僚からひき離し、競争を發展させ、個人的利益を追求するような状況におくこと」である。とはいえ、このことが資本主義の工場という社会的条件に限定されるものでなく、刺激という具体的な意味をもつことをフリードマンも認めないわけではない。ただ、テイラーがこの方式しか認めないということが問題なのだ。

「研究部門」が作業動作をストップウォッチで測定し、個人ごとに作業内容を限定し、個人を原子化し、そのあとである高さの率で設定されている出来高賃金体系で補完する。これがかれのシステムを労働者にうけいれさせようとするテイラーのストラテジーである。「私が労働者にたいして行った一連の実験によれば、労働者にもはっきりその漸増が感知しうるような連続的な賃金の増額を保障することによってしか、平均以上に労働者を働らせることはできない」⁶¹⁾。興味深いことに、このはっきり感知される増率とは、テイラーによれば平均賃金にたいして 30~100 % なのであって 60% において安定する (この数字の根拠はベツレ

ヘム・スチール社で鋼材運搬係のシュミットを用いた実験だけである)。安定するとテイラーのいう意味は、この率をこえ「あまりに急速に豊かになる」と、労働は常軌を逸し不適切で散慢になるからである。

フリードマンは、テイラーのストラテジーとは要するに、1) 眼の前にえさを置く、2) 頭上でムチの音をひびかせる、3) 相互に競争させ最後の限界まで労働者を働らせることだとみている⁸²⁾。じっさい、テイラー・システムのもとで、指示された能率での職務の基準を達成しているか否かは、白か黄のカードを渡すことで示される。「もし基準を達成する労働者の賃金をひきあげ、平均を下まわる労働者を解雇し、より注意深く選ばれた人びとをもつてかれらと置きかえるなら、自然な緩怠と意図的な緩怠とをとり除くことができる」⁸³⁾。労働市場の条件と労働組合運動との存在を考えるならば、このような「能率による残酷な選別」はいつまでも可能というわけではあるまい。ただテイラーの時代、十九世紀末のアメリカ経済の離陸の時期には多くの過剰な労働力が存在していたから、テイラーの理論も現実性をもちえたのであろう。

これまでフリードマンによるテイラー主義分析をみてくるうちで、テイラーの「科学的方法」なるものが自覚されないまま価値や立場にかかわる選択をひそめているものであることが理解されたであろう。このことは、テイラーが社会的・経済的なことについて発言するとき、おおいがたく明白になる。

たとえば、労働組合の存在と運動とはテイラーにとって理解できないもののひとつである。ミッドヴェル社での紛争でみたように、労働の能率の向上を妨げているものも、緩怠の原因となっているのも、労働者であり労働組合であるとかれは考える。労働者が賃金交渉を有利に進めようとしてストライキを採用することはテイラーには不正なこととしか考えられないし、そこにアメリカの繁栄への脅威さえ、かれはみるのである。それではどうしたらよいというのか。労働組合の決定への参加など認めることなく、作業内容、配置、賃金についての専門家が「科学的方法」に従って決定するかれのシステムを実現することである。テイラーの観念では、専門家は科学的・数学的方法を産業生活に適用する。だからそのみが信頼するに足りる。「科学的方法」は労働者と資本家のあいだの「真の利害」、すなわち、科学的労働組織による産業内での「協調と平和」をも明らかにするものなのであった。

ここでもテイラーは、社会的・経済的な領域で工学技術者として発言していて、対象のうちに含まれる多くの条件を一切考慮せず、ごく限られた変数だけで「合理的な方法」を考える抽象的独断に陥っていると、フリードマンは指摘する⁸⁴⁾。たとえば、技術進歩・合理化による生産の増大にしても、ただそれだけなら失業を生む条件ともなる。つまり、同時に労働者の賃金をひきあげ消費を増大させることがなければ、合理化の導入により増大した生産物

は狭隘な消費という限界にぶつかるということさえも、テイラーの考慮には入っていない。かれには、ただひたすら能率を向上させることが問題であって、「経済的調和」はそのあとでおのずとやってくると説き続ける。これはクウェーカー教徒たるかれの信念であろうか。しかし最終的なねらいは労働組合運動をおさえ、専門家の設定する基準を、その基準が本当はどこに由来しているか問わないまま労働者に押しつけることで終わっている。テイラーにおいては、最終的に「モラルは利潤に従属させられている」。フリードマンはそれを見ぬくのである⁶⁵⁾。

フリードマンのテイラー主義分析の論考は、はじめは1935年の『経済社会史年報』の技術特集号にのせられたが、この論考は『進歩の危機』では「二人の偉大な理論家」という表題の章で、フォードの思想の分析と一緒にされている。このことはフリードマンのテイラー主義ないし合理化についての考え方をよく示していよう。テイラーの思想とフォードの思想とが一緒になって巨大な合理化の運動が生じるのだ。だから二人あわせてみておかねばならない。いうまでもなく、フォードとは自動車王のヘンリー・フォードであり、ベルト・コンベアを自動車工場の工程に最初に導入し、流れ作業方式による大量生産を開始したその人である。このフォードの思想をとりあげる意味は、テイラーが労働者の作業を要素にまで分割し標準化したものを、フォードが分割されたものをベルト・コンベアであらたな形で結合し、再編成したというところにあるのだろうか。そのような技術的な意味のことではない。フォードの思想をテイラーのそれと比較してみるなら、社会的な条件がより広く考慮に入れられていることが知られよう。テイラーはそのシステムをエンジニアのひとつの抽象的なプランとして示すことしかできなかったが、フォードはこれを「進歩の思想」の流れに位置づくるものとしてどこまでより豊かな現実にもくしたものにすることができたか。あるいはどこに限界をもっていたか。フリードマンはそれを明らかにしようとするのである。

テイラー主義も社会の合理的な編成のプランであったといえないことはないが、やはり実験的方法の体系という性格がつよい。これにたいしてフォード主義はひとつの理論などというものではない。1920年のアメリカを席捲するひとつの社会現象なのだ。「フォーディズムはヘンリー・フォードの個性や巨大工場をはるかにこえたものである。大規模化した産業資本主義が大量生産方式と高賃金政策を結びつけるところには、いつでもフォーディズムがある。大量生産は大衆の購買力の増大のうえで発展する」⁶⁶⁾。このかぎりフォードはテイラーとはことなり国内市場への視点を持ち、社会的生産力の論理にふれている。問題はその論理をどこまで具体的に正確にとらえたかである。

フォードがくりかえし論じていることのひとつに、企業 (l'industrie) というものはその名称にあたいするからには「創造的」でなければならぬ、という主張がある。正当な企業た

るためには富を創造することがその条件である。だが、富を創造するとフォードがいうのはどのような意味においてであろうか。出発点において企業は人びとのもつある欲求と、少なくとも誕生しつつある欲求と対応していることが必要である。しかし、次に創造的な企業はこれらの欲求を発展させ、変形する（フォードが「大衆の教育」というているのはこのことだ）。他方また、企業は生産方式をより完成したものにする努力を行わねばならない。生産方式、配置、機械、ストップウォッチによる動作ごとの時間の測定にいたるまで、絶えざる改良を行うことが必要だというのである。それゆえ、フォードによれば企業とはたえざる生成であり、「いつかは天井にぶつかるかも知れない」などとは考えてはならない。コストをひきさげ、販売を増大させるあらゆる努力を払うこと。改良、絶えざる改良、それがすべてである。だからフォードの自動車工場ではフォードT型車は、1908年に発売され、1927年5月まで生産され続ける。フォードT型車を構成している部品は最初と最後ですこしもちがわぬが、製造工程についていえば、部品のことごとくについて改良が行われているのである。だから「企業は決して停止することのない技術進歩の流れのうちにあり、停止・停滞は死を意味する。その製品について需要が保たれ、増大することを欲するならたえず進歩することが必要である」⁹⁷⁾とフォードはいうのである。

じじつ、1920年代のアメリカ経済の繁栄は、企業へ高利潤をもたらし、高賃金の政策を可能としていた。そして生産を増大し供給を増大するなら、J.-B. セイのいう「販路説」そのままに需要も自然とひらかれると思えるような状況にあった。いや、それ以上に企業が「大衆を教育し」て新しい需要をつくり出しさえする状況にあったのだ。だが、このサイクルはフォードのいうように調和的に限りなく作用して、文明生活は無限に向上していくであろうか。否である。フォード主義を1930年代のなかばの時期になって検討しているフリードマンは、フォードのいうアメリカ経済の繁栄が1929年に始まる大恐慌によって一挙に崩壊し、いまだに経済活動が低迷したままであるのを眼前にしているのである。それではフリードマンはどこにフォード主義の陥穽をみたのか。

生産の増大は、労働者に払われる高賃金によって、購買力の増大によって、いいかえると労働者階級を中産階級化することによって支えられる。そして人為的につくり出される欲求によって生産はさらに拡大する。フォードは、もし大衆が商品を買わないとしたら「その商品は過去には効用を有していたにせよ、現在の人びとの欲求とはもはや対応しなくなった」という理由によるにちがいないという。だが、アメリカで膨大な人口がフォードのいうこのサイクルにひきこまれるときになにが生じたのであったろうか。「供給過剰」である。しかしそれはフォードが論じていたのとはちがって、「空しく刺激された《欲求》は当初の契約によって請求される貨幣をもたなかった」⁹⁸⁾からである。人びとは欲しがらないのでなく、買いたくても買えなかったのである。恐慌の勃発によって、販売が人びとの欲求に依存して

いるのではなく、じっさいに貨幣をもっている人口に依存していたことを、フォードは認めなければならなくなる。だが、フリードマンによるなら、「アメリカのプロレタリアのうちで購買力の再配分を行うことなど、フォードが決して見ようとしないうちの問題だったのである」⁶⁹⁾。フォードは社会的生産力の論理にはふれてはいても、それをとらえるにはほど遠かったのだ。

さきにみたテイラー主義のもとで生じてくる重大な問題、思考と実行とが分離されてしまい、労働者が自分の行っている作業についてまた機械について原理的な理解も、素材についての知識も労働者は失っていく「熟練の解体」の問題が、フォードにはどのように論じられているのか、またフリードマンはそれをどうみていたかについて、さいごにふれておこう。

フォードの考えでは、かれの工場での合理化は労働者から思考をうばいとることなどない。「(合理化は) たしかに少しづつ専門的職人を消滅させていく。しかし、たえずその比率を増大させつつ、産業は専門職人を求めている。この人びとはたんに熟練のみでなく、ある種の普遍的能力も求められている」⁷⁰⁾。フリードマンもソヴィエトでのポリテクニズムの理想を実現しようという試みをすでにみていたから、フォードの語るところを慎重に検討する。

「精密さ (precision) とともに普遍性は新しい職人性 (nouvel artisanat) のあらわれである。フォードはこの分業の弁証法を予感していた。分業の弁証法はマニファクチュアや初期の工場でいったん熟練が解体されてしまったのち、今日では多目的自動機械の操作においてや、ベルト作業のチームのなかで、新しい諸々の操作を結合する方向へみちびいている」⁷¹⁾。フォードのいうように、資本主義の体制のもとにある合理化された工場のなかでも、多くの工程を回転軸を介して結びつける多機能的な複雑な工作機械の出現によって、いったんはロボットの位置にまでひき上げられたかにみえる労働者が、再び指導者となり主人となる可能性をフリードマンは垣間みたのである。そしてこう続ける。「この指揮者は、自分の機械について精通していなければならないし、高度の技術的知識と知性を有していなければならない。今日、日々作業場に浸透するようになっている大量の機械を維持し、修理するため、またモデル機械を完成させるため、大量のすぐれた専門家が必要である。とくに多くの作業 (tâches) に通じ、同時に正確な作業と知識とを増大させていく新しい職人の生れる苗床を、工場はつくり出していく必要がある」⁷²⁾。フリードマンがこの文章を書く数年前、日本でもこの分業の弁証法をみて、「かくの如き 特徴的な 旋盤工は、労働力群編成の枢軸としての、規定的な地位において、最もよく透視の利くものとして現はれる」⁷³⁾とし、それを社会変革の担い手の中軸に位置づけた論者がいたが、フリードマンは、そこまで議論を進めてはいない。

フリードマンのフォード批判は、フォードが新しい職人性の出現をもって、思考と実行の分離の問題は解決されるといっている点にむけられている。合理化され近代化された工場に

ポリテクニズム的人間を生み出す動向はたしかにある。しかし、それはフォードの自動車工場のすべての労働者についていいうることであろうか。1924年にデトロイトのフォードの工場で85%の労働者は単純工である。しかしフォードはこの数字をもっても「新しい職人性」という思想を否定するものとは思わない。フォードは「大部分の労働者は責任のない単調な作業を好む。思考することは好まない」⁷⁴⁾、だから望むものだけが「新しい職人」になればいいのだというのである。今日の西ヨーロッパ諸国にみられる「テイラー主義の危機」は、事実をもってフォードの主張に反証をつきつけているのではないだろうか。合理化された産業のもとにいる労働者が創意や責任を要求される労働作業を求めないのかどうか。1946年の『産業機械化における人間の問題』に至るまでのフリードマンはそれを問題にしつづけるし、そこでの労働社会学の体系化の試みも、のちにみるように、この問題をめぐって進められるのである。

5. 『聖なるロシアからソヴィエトへ』をめぐって

アンドレ・ジイドは1936年6月、ソヴィエトを訪問する。「ジイドの訪問は宿望の達成であったが、それはまた同時に瀕死のゴリキイを見舞うためでもあった」⁷⁵⁾。ゴリキイはジイドがモスクワに着いた翌日、6日18日に亡くなり、ジイドはその葬儀に参列する。さらにまたかれは文化擁護国際作家会議を記念する大会に出席し、そのあと二ヶ月間ソヴィエト各地を旅行してすごした。そして帰国したあとジイドは『ソヴィエト紀行』と『ソヴィエト紀行修正』とをあらわすのである。それまで世の人はアンドレ・ジイドは「熱心なソヴィエトの友」であると思っていたから、そこに「ソヴィエト連邦は、ぼくらの期待したもの、それ自身が約束したもの、それ自身がまだ斯くありと見せかけようとしているものでは、既になくなってしまった。それはあらゆるぼくらの期待を裏切った。ぼくらが若し、希望を失いたくないと思ったら、余所へその希望を移すより他に仕方がない」⁷⁶⁾という言葉を見い出して仰天したのである。そこでジイドは「或ひはトロッキストとして、或ひは日和見主義者として、手酷い悪罵と攻撃をうけた」のである。ところで、G.フリードマンもジイドがソヴィエト旅行を行っているのと同じ時期に、1936年夏に、3回目のソヴィエト滞在を過している。フリードマンはこの滞在のあと『聖なるロシアからソヴィエト』を著わすのだが、当然のこと、このジイドの旅行記には無関心ではいられない。だが、ジイドとフリードマンの書物につく前に、当時のフランスの知識人たちの状況をふりかえっておかねばならないであろう。

「1930年代後半のヨーロッパ人の眼にはソヴィエトは二つのものであった。ひとつはシンボル、もうひとつは観察することのできる現実。だがシンボルの方が現実を圧倒していた」⁷⁷⁾とデヴィッド・コートはいっている。それだからアンドレ・ジイドの『ソヴィエト紀行』をめ

ぐる論争は、統計数字をあげたり、個人的な観察の例をあげたりしてなされたが、全体としては現実の認識をめぐってというよりは政治的信念のコンテキストにおいて行われたのである。「ソヴィエトについて、欠点を示す事実をジイドがあげると、批判者は反対にすぐれた事実をかかげる。そしてそれは論者のモラルに移されるし、政治的信念の対立、そして歴史の見方の対立へと移されてしまう」⁷⁸⁾という具合だったのである。さらにいえば、コミュニストといわゆる「同伴者」とよばれる理想主義的な一部の作家たちのソヴィエト観は、中欧におけるファシズム政権の出現やスペイン市民戦争の勃発という国際状況によって色濃く影響されている。それだからジイドの『ソヴィエト紀行』は、左翼の知識人たちから「スペインの共和国側の人びとを背後から襲うものだ」といわれたのだ。たとえば、ジャン・カスーは決してコミュニストではないが、ジイドが「抽象的精神」ないし「宗教的な形式のもとで」ものをみていることや、ファシズムへの無警戒、スペイン市民戦争のことをなんら考慮に入れていないことを指摘し、注目させたのである。

左翼の知識人たちのあいだで批判と攻撃とをうけるその旅行記で、ジイドは具体的に何を語っていたのだろうか。『ソヴィエト紀行』をのぞき、それと対照することは『聖なるロシアからソヴィエトへ』でのフリードマンの見方をよく浮き立たせてくれるであろう。

ジイドの旅行記のうちでよくとりあげられるのはスタハノフ運動についての言及、そしてコルホーズの印象である。1935年10月、ドネツ炭坑の労働者アレクセイ・スタハノフの名と結びついた労働者たちによる生産達成記録の更新をめざす巨大な運動が生れる。西欧のコミュニストたちはこれをソヴィエトの輝やかなしい成果として宣伝していたのであるから、ジイドとしてもふれないではいられない。しかしジイドの筆はひどく冷淡である。「スタハノフ運動は（ロシアの労働者の）安逸を揺り動かそうとして、すばらしいやり方で案出された。スタハノフ運動は、すべての労働者がよく働いている諸国では必要ないものであろう。しかし、この地では人びとは放置されているなら、大部分の人びとは怠惰に流れてしまうのである」⁷⁹⁾。それゆえ、スタハノフ運動はかつて帝政ロシアの政府が怠惰なロシアの民衆を働かせようとして採用した「笞刑」の代用物とされてしまう。だが、ソヴィエトにおける労働の問題に詳しいフリードマンからみたら、これはとんでもない誤りだ。だがそのことはあとでふれよう。もうひとつの模範コルホーズを訪れたときのジイドの印象というのはこうである。「私はこの非常に富裕なコルホーズの多くの住宅を訪れた……。これらの住宅の《内部》で、私がしみじみと感じたあの異様な物悲しい印象を、どう表現したらいいだろうか。それは謂はば完全な非個性化といった感じのものである。どの家の中にも、同じように見苦しい家具、同じようなスターリンの肖像があるが、その代り、他のものは完全にはないのだ。小さな飾り道具ひとつなく、ほんのわずかな個人的な記念品もない」⁸⁰⁾。このコルホーズをみたとき、ジイドは案内人からこのコルホーズの人びとは幸福であり「みんな一緒になって

楽しんでいる」ときかされる。しかしジイドには信じられない。たとえばクラブ、文化公園、集会所がそこにあるとしても。「すべての人びとの幸福は、(ここでは) 個々人の非個性化しなければ得られない。だから幸福になるためには、みな互いに相似しなければならぬことになる」⁸⁹⁾。ジイドは模範コルホーズの印象から、この「非個性化」が体制によって目標とされているのだと考える。フリードマンからみればジイドの見方は正しくない。コルホース農民が画一的な住宅に入っていることは、ソヴィエトにおける発展のひとつの段階として考えられるべきことであって、体制の目標であるなどとは考えられてはならない。比較されるべきは農民たちが旧体制下でムジークとして生活していたときの状況、ムジークの物質的・精神的な貧困なのである⁸¹⁾。

フリードマンがジイドのいうことに同意しているところもある。たとえば、ジイドが旅行中に会うソヴィエトの知識人たちにみる画一性、本当の意味での批判性の欠如といった印象。ジイドはソヴィエトを訪れる以前、この地では「自己批判」が非常に重要になっていたことをよく知っていて、それがどのような成果を生んでいるかみることを期待していた。だが、かれの眼にするものはちがう。「私はこの批評は告発や忠告以外には、また、これこれのことは《基準にかなう》ものであるかどうかと自問自答すること以外には、存在しないといふことを直ぐに了解しなければならなかった。人びとが議論しているのは規準そのものについてではない。論議されているのは、これこれの作品、これこれの身振、あるいはこれこれの理論が、この神聖な基準に一致するものであるか否かを知ることである」⁸²⁾。これと同じことは数度のソヴィエト滞在のさいフリードマンもみていて、「(マルクス主義を本当の意味で発展させようとするなら) 公式や引用をふりかざすだけでは何にもならない」⁸³⁾と感じていたのである。だが、フリードマンはすぐに付けくわえる。ジイドの旅行した1936年8月はジノヴィエフ=カメネフの裁判が開始され、国内的な緊張の時期であったのだから、知識人たちはその言葉にとくに慎重になっていたのだ、と。それにしても、長い眼で見れば相互な自由な批判こそが、この体制にとっても利益であることであろうと、フリードマンも思うのだ。

『ソヴィエト紀行』はこのように、スタハノフ運動、コルホーズの印象、知識人にみられる画一性から、当時ソヴィエトでくりひろげられていた形式主義についての論争、そしてまた賃金格差の問題へと多くのことについてふれている。このように次から次へと多くの問題をとりあげていくうちで、全体をつらぬいてひとつのテーマを浮びあがらせることをジイドはねらっていたのであろう。1936年夏という時点でのソヴィエトは「革命当時の方式に無関心になっている」、「レーニン主義の理想から逸脱している」、「ソヴィエト自身が約束したものでは既になくなっていく」というテーマがそれである。「熱心なソヴィエトの友」であったジイドは初めからこのような眼でソヴィエトを眺めていたわけではあるまい。だとしたら、

なぜジイドはこのようなテーマを浮び上げることになるのか。フリードマンはその理由をひとりの心理観察家、モラリストとしての眼でソヴィエトの人びとの生活を眺めていたジイドが、「社会問題という深く生い繁った森」へとふみこみ、迷ってしまったことの結果であろうと考えている⁸⁴⁾。たとえば、スタハノフ運動について論じるならそれ以前からソヴィエトで展開されてきた諸々の形態の社会主義的競争との関係で考えられなければならないであろうし、賃金格差の問題についてふれるなら、諸生産部門への労働力の配分という国家計画の要請を考慮にいれる必要があろう。社会問題に入っていくにあたっては当然考慮されてしるべき歴史的な条件や経済・政治的なコンテクストが、ジイドのばあい完全に欠落している。そうするかわりに、1936年夏のソヴィエトの現実を「独裁が廃止され、労働に従ってではなく欲求に従って各人に再配分が行われるような時期に存在するであろうこと」と対照させ、性急な判断を下すことになってしまっている。これは合理的というより感情的な態度であって、パースペクティヴを誤らせ、ジイドがみた事実を全体のうちに位置づけて判断することを不可能にしている。フリードマンはそう考える。ジイドのいう「レーニン主義からの逸脱」ということにしても、レーニンのもとに存在していたのは「 Kommunismusの段階と労働者の共和国」に到達するという目標であり、決して「当初の理想」や「初期の方針」というようなものがあつたわけではない。「現在のソヴィエトの指導者たちが、ファシズム政権の成立、迫りくる世界戦争という世界政治の条件のなかで、この目標に達するため適切な手段を採っているかどうか」⁸⁵⁾は問うことはできようが、結論を下すにはまだ早すぎる。けれども、ジイドはこのように問うこともなく、ソヴィエトの考察にあたって、シャルル・ペギーの言葉でもって、現在のソヴィエトは「信仰のようなひたすらな理想 (mystique) から政治 (politique) へ移行し、墮落している」⁸⁶⁾と語ることになってしまっている。それゆえ、「この書物が広めている不信によって、かれがある社会体制の国家にたいして行っている告発によって、……この心理作家は1936年冬のフランスにおいて、ヨーロッパにおいて、かれはその責任に気づいていないが、私が恐れているある政治的役割を果すのである」⁸⁶⁾とフリードマンは記すのである。

『聖なるロシアからソヴィエトへ』の冒頭には、「聖なるロシア」と題される章が置かれている。この章の最後のところでフリードマンはこう書いている。「大地から、諸々の元素から、あるいは小石から立ちあがってくる聖なるロシアが、いまでもきみを捉えるような場所がある。歴史が証言しているもののなかでそれをはっきり見つけ出すに先立って、いくたび、今日のロシアを通じて、聖なるロシアを私は感じたことだろうか」⁸⁷⁾。この言葉、そしてこれまでみてきたジイドの『ソヴィエト紀行』へのフリードマンの批判の仕方からもうかがわれるように、フリードマンのソヴィエトを眺める立場は、あくまでもそれを歴史的なコ

ンテキストに位置づけて、またそれが十分であるかはともかく、政治・経済的な条件と拘束とを考慮にいれてみていこう、というものである。革命から20年を経たとはいえ、すぐれた観察のセンスをもつフリードマンが感じ取っているように「聖なるロシア」は、なおソヴィエトの人びとをとらえていることがあるのだ。それと対比すること。このことをねらい、冒頭にフリードマンが「聖なるロシア」の章を置いたことについては、リュシアン・フェーヴルの書評をみるがいい。「＜聖なるロシア＞が出発点にあったというのではない。そのねらいは聖なるロシアの概要を頭にいれておくこと、ソヴィエトがうけついで原料を理解しておくことだ。それとの対比において現在ソヴィエトで行われていることが明らかになる。これは社会学者の発想というよりも歴史家の発想である。素描画の背景を黒くぬることによってソヴィエトの創造したものを白く浮き立たせる、建設されているものはまだ貧弱かも知れないが、そこで生じている動きを浮びあがらせること、それがねらいである」⁸⁸⁾。

このような眼でもって、フリードマンはソヴィエトの子供たち、若い人びとの活力にみちた姿などを生きいきと描く。もちろん若い人たちと父親たちの対照的な姿も含めて。ソヴィエトの学校のこと、とくにそこで労働・技術と理論教育とを結びつける試みなどについては第3章でふれたから、ここでは立ちいらぬことにして、フリードマン自身がくわしく、またさしあたりかれの労働の社会学の構築との関係から、「工場、技術のためのたたかい」、「労働者、生活水準」の二つの章について主としてみていくことにしよう。ジイドとフリードマンの立場や態度のちがいはそれだけでも十分あきらかとなる。

「工場、技術のためのたたかい」でフリードマンは、1918年のレーニンの有名な「社会主義とはソヴィエト・プラス・電化である」というスローガンからN・E・P、農業における集団化の開始、1928年10月から1932年12月までの最初の5ヶ年計画に至る歴史をたどり、そのあとで始る第二次5ヶ年計画のさなかにある工業化を、モスクワ近郊玉軸受工場とゴリキ市にある自動車工場について、ルポルタージュ風に描いている。フリードマンはあくまでものぐとを直視しようとしているから、そこでみられる不十分なことに目をつぶったりはしない。たとえば、当時のソヴィエトでは労働の資格化はまだ確立されていなかったから、労働者たちは浮動的で、職種間での流動性が高すぎる。大工や金属工がセメント工となり建物のコンクリートをうつなどということが常態であったから、建てられたばかりなのに、工場の壁はすでに無数のヒビ割れが生じていたことなども、見逃していない。

しかし、決して、そのことから性急な結論をひき出すことはしない。1930年代、西欧では恐慌とそのあとに続く経済の低迷と失業者の増大を前にして「技術の危機」が叫ばれていたから、ソヴィエトをみてきた西欧の一部の知識人たちは、ソヴィエトの人びとのうちには「機械崇拜」(l'idolatrie de la machine) がみられると抽象的に批判していた。しかし、この批判は妥当なものであろうか。ロシアの民衆にとっての機械は西欧の人間にとってのそれ

とは意味がちがうのではないか。フリードマンは逆にそう問いかける。「ステップのなかで、人びとを労働へ、またリクリエーションへと運んでいるトラックを見に行ったらいい。村から村へオーケストラの団を運び、映画の機材を運んでいる、あるいは俳優たちを、衛生についての宣伝隊を運んでいるトラックを見に行くといい。あらゆるところで機械は人間生活に役立っている。そのことが人びとの眼を眩ませる。ソヴィエトはそのような国である」^[89]。これにたいして西欧はどうか。「ソヴィエトから 戻ると、人は機械をことになった眼で見るようになる。ふんだんに、ありふれたものとしてあり、ニッケル・メッキで輝いている機械。小犬をつれたエレガントな婦人に洋服店からカフェへ、カフェから洋服店へと運転される自動車、それを見られるには若干の時間が必要である」^[90]。その機能と役割からいって、本来機械があるべき場所にあるのはソヴィエトの方であって、西欧のばあいにはある倒錯があるのではないかと、フリードマンはいいたいのであろう。だから、こう付け加える。「人びとは機械なしには生きることができないのだ。それは聖なるロシアに埋れていた人びとを前進させる有力な手段であり、人びとを工場の技術と出会わせるというときには苦痛をもたらすこともある手段なのだ。ここでは機械こそが人びとを精神的にも身体的にも貧困から解放することができる」^[91]。そして、5 ヶ年計画こそはこの巨大な努力の第一歩をなすものดังกล่าวは位置づけるのである。

ソヴィエトの5 ヶ年計画そのものについては、ここで立ちいる必要はあるまい。ただ、それがロシアの経済全体においてどのような変化をもたらしたかについて大まかなイメージをもっておくこともむだではないだろう。世界恐慌と戦争の接近の予想ゆえにいっそうの飛躍が必要であるという認識に立って、強力な重工業化が立案されたが、最初の5 ヶ年計画の時期には、それは西欧諸国から機械を購入し、外国人技術者を招くという形で推進する他なかったのであり、ロシアの原料や資源はこれら外国の機械によって掘り出されていた。だが、第2 次5 ヶ年計画が始ると各種機械の国産化が進められ、外国人技術者も減少していく。そして、1934 年以後になるとソヴィエトは資本主義列強にとっての「肥えた牛」ではなくなる。最初の5 ヶ年計画のうちで、カルコフ市のトラクター、サラトフのコンバイン、ゴーリキ市の自動車、モスクワとオルジョニキゼの工作機械、アゾフスタルとトゥーラの鉄鋼業というように近代工業の中心地が形成されていったのである。だが、この強行的な重工業の創出は他の部分に犠牲を強いずにはいなかったのであり、たとえば、今日に至るまで周知のソヴィエト経済における軽工業部門の弱体の原因となった。フリードマンも決してそれを見ていないわけではない。それゆえ、「ソヴィエト工業は、1936 年において決して完成されているわけではないことを忘れないでおこう。それはいまだ《英雄時代》にある」^[92]というのである。1936 年夏に滞在しているフリードマンの眼の前で「英雄時代」は過ぎ去り始め、「聖なるロシア」的なものは消えようとしていた。それにかわって、電力センター、高炉、農業の集団

化が出現していたのである。

それゆえ、1928年に始まる最初の5ヶ年計画以来、ソヴィエトで行われている努力は新しい工業をつくり出すための努力、技術的に高度な労働力をつくりだすためのそれである。

『聖なるロシアからソヴィエトへ』のうちで、労働の社会学者としてフリードマンがもっとも力点をおいていることのひとつは、この問題である。フリードマンの言葉を借りるなら、それはなによりも、機械をつくり出す能力のある労働者を創出するという問題だ。

フリードマンはその手がかりとして、第一次大戦前、帝政ロシアにおける産業構造と労働力構造を想起することから始める。そこでは、都市住民は同業組合に組織されているものも含めて、大部分が零細な職人、小商人である。大戦直前でさえ、工業労働者は300万人とみられているにすぎない。全人口の85%は地方の農村に住む農民である。とはいえ、外国資本の導入によって行われたロシアの工業化は鉄鋼・石炭の部門にごく少数ながら突出的に高度に近代化された工業をもっていた。このような産業構造は、かつて日本資本主義論争のなかでもいわれたことだが、明治初期に維新政府の主導により創出されたわが国の旧体制下の産業構造とあるていどまで類似している。山田盛太郎の『日本資本主義分析』の「序言」のなかで、日本資本主義と旧露資本主義とがともに「軍事的封建的」という規定があたえられていたことを想起すればよい⁹¹⁾。広汎な隷農制農民を基底にもつ一方で、鉄鋼と石炭などの部門や軍需工廠にごく小部分ながら、技術的に高度な工業的部分をもっている。そして半封建的な国内体制の維持という治安的な必要から軍事的性格を帯びざるを得ないという転倒的な産業構造である。

だが、日本とロシアの旧体制下での類似はそこで終る。帝政ロシアの体制下での労働力についてみると、人口の流れは奇妙なことに農村から都市へというのではなく、都市から農村へという方向に動いていた。フリードマンがこう指摘することでもいいたいのは、西欧でみられた技能的労働力の近代化のパターン、すなわち、同業組合による職種 (*métier*) と技能 (*qualification*) とのコントロールが伝統的に行われていて、それが近代的な工業のなかでも継承されていくというパターンが、ロシアでは十分に形成されていなかったことであろう。

ロシアでは職種 (*métier*) が固定されてもいないし、安定してもいない。飢餓状態の都市住民は農村に行き糊口の途を求める。かれらはミールの権利にあずかれないから、零細な土地を買わねばならず、生活は困難である。しかし、農奴解放後も、この人口の流れは続いていた。そしてその一方、ムジークたちが農村を捨て都市に流れこむばあい、かれらはなんの職業的技能をもたぬ存在として、流れこんでいた。それゆえ、旧体制下では都市住民も農民もともに浮動化し、人口の流動化は顕著であった。フリードマンはこのような構図を粗描する⁹²⁾。外国資本の導入のもとで工業化が進められていたペテルブルグなどの都市には、なる

ほど若干の工業労働者が存在している（さきの300万人という数字がそれだ）。しかし大戦前夜に、ロシアは全体としてはなお膨大な農民大衆から成り立つ社会であって、労働者により構成される政治的・文化的な核は存在していなかったのだ。

「聖なるロシア」からひきついた状況がこのようであるとして、5ケ年計画のめざす重工業化を担う労働者はどのようにして形成されるのか。先ず初等教育の完全普及であり、さらに上級の学校や工場で労働者を教育するプログラムを充実していくことである（F. Z. O. U. などの制度のことは第3章ですでにふれておいた）。そして、労働者全体の技術的教養の水準を高めていくことである。それのみにとどまらない。各々の職場において、労働者の創意をひき出すためのさまざまな試みが企てられる。「労働突撃隊」（oudarnik）もスタハノフ運動もそのような企てであろうとフリードマンはみるのである。社会主義的競争は、量の増大をめざす労働突撃隊として先ず始められるが、次いで5ケ年計画による重工業化は質の向上をめざす運動を促す。それがスタハノフ運動だと考えるのだ。それゆえ、フリードマンによるなら、スタハノフ運動は1935年10月に突然あらわれるものではなく、それ以前から行われていた労働者の技術的教養を高め、無教養状況をこえるための労働者への働きかけをさらに先へと進めるような新しい波として考えられるべきものである。

しかし、諸々の生産記録を次々と更新していくこのスタハノフ運動は、またコミュニストによる「輝やかな社会主義建設」の宣伝の格好の素材となったこともあいまって、その性格の不分明さゆえに、ヨーロッパの労働者や知識人にとまどいを生じさせていた。その反動か、ジイドがスタハノフ運動についてはなほだそっけない筆で書いているのはすでにみたとおりである。それゆえ、フリードマンはスタハノフ運動の生じた条件やソヴィエトの現実のなかでのその意味をもう少し詳細に説明しようとする。

フランスやヨーロッパの労働者からこの運動が猜疑の眼でみられたというのは、フランスやヨーロッパの諸国では「荒し屋」（ravageurs）なるものの存在が知られていたからである。すなわち、この人物は工場経営者の意をうけて、平均の労働者よりもはるかに高い労働量を達成し、そのことで同僚たちに重い労働基準を押しつけ、また結果として賃金をひき下げさせる役割を果すのである。スタハノフはソヴィエトでの「荒し屋」でないかと思われ、社会主義の体制は労働者にたいしてさらにきびしい基準を課すのでないか、と思われていたからである。だが、フリードマンによればこの疑問はすべてこの運動の性格を正しく知らないことから生じるのだ。

フリードマンの論点は三つある。第1に、スタハノフ運動において、諸々の分野で更新されている記録はひとりの個人のものであるとして伝えられているが、じっさいはある作業チームのもとで分業化して行われている。第2に、スタハノフ主義の運動家は決して「荒し屋」ではなく、例外的によく働いた労働者たちである。かれらは模範を示すことでソヴィエトの労働

者たちのもとでみられる技能の一般的な低位な水準をひきあげ、技術にかんする無教養をのりこえようとしている。第3に、これらの記録は、ときには最新の装置を利用しているばあいがある。しかし、全体としてみればドイツやアメリカの企業で達成されている水準より高いわけではない（スタハノフ運動家たちの平均能率についてソヴィエトを訪れていた西欧の技術者は、西欧企業のすぐれた労働者たちの $\frac{1}{2}$ から $\frac{1}{3}$ とみていたのだ）。それゆえ、多種多様な分野で、スタハノフ運動家は従来の基準の能率や作業量を更新できたのである⁹³⁾。

以上のことをふまえておくと、ソヴィエトにおいても近代化されている工作機械の工場などでは、スタハノフ運動が行われても記録の更新といえるものはごくわずかしかなされないこともよく理解できる、とフリードマンはいうのである。つまり、かれによるとスタハノフ運動の根底にあることは、作業チーム内での分業、機械化した工程を合理的に組織化することで能率を高め、労働の質を高めることである。このことは西欧のテイラー・システム化された工場のなかではすでに実現されていることである。西欧のテイラー化された工場とスタハノフ運動とのちがいは、後者のもとでは合理的な組織化が労働者自身の創意において行われているところにある。いずれにせよ、この運動は遅れているソヴィエトが西欧諸国に追いつこうとして行っている努力に他ならない。そこに注目すべきなのだとフリードマンはいう。「判断すべきは、西洋との関係においてではなく、ソヴィエトの労働者たちの運動の諸段階と、つまりソヴィエトの過去との関係においてである」⁹⁴⁾。

党派的な宣伝に与みもせず、ものごとを直視するフリードマンは、ソヴィエト全土でくりひろげられているこの運動に、行き過ぎや誤りさえも含まれていることに眼を閉ざしていない。床屋の作業や官庁における翻訳作業においてもスタハノフ運動は進められているが、そのような運動はこれらの作業の質を低下させることにしかならないであろう、というように。しかし全体としてみれば遅れたロシアの民衆が、産業のなかで職業的・技術的な教養を高めていくというコンテクストにおいて、フリードマンは共感にみちた理解を示している。

ソヴィエトの労働者の生活水準ということでは、労働者の賃金についてふれないではいられない。労働の社会学者のカヴァーする範囲の問題であることはもちろんだが、社会主義は平等の理想を含む思想であることから、ジイドの『ソヴィエト紀行』でもみられたように、ソヴィエトの現実の賃金格差の問題は、西欧の知識人にとって熱い論争点のひとつをなしていたからだ。

社会科学にたずさわるものとして、フリードマンはソヴィエトの賃金政策がかなり複雑なものであることを知っている。各地方の労働者の分布の状況、国家計画に従っての部門間での労働者の移転、予算、各産業部門の状態、それを重点となるポイントへと刺激して移動させる段階へとひきあげていかねばならないが、それにはソヴィエトの大衆の心理や意識状

態も考慮に入れねばならない。いずれにせよ、ソヴィエトの賃金政策は工業建設の推進とは切りはなせない。この認識のもとで賃金体系と格差づけの問題を概観するのである。

詳細な部分までは立ち回らないとして、フリードマンのあげている平均的な例をひとつみおこう。ある金属工業の工場では労働者を技術資格によって7つのカテゴリーに分け、カテゴリーごとに賃金の格差がつけられている（第1のカテゴリーで月に90～100ルーブル、第5カテゴリーで200ルーブル、第7カテゴリーで250～350ルーブル）。全体的な傾向としては中級・上級のカテゴリーの労働者の賃金は第2次5ヶ年計画を通じ大幅に引き上げられ、厚遇する政策がとられている。そして、これ以外に特殊な技能資格にたいしては非常に高い賃金が払われていることに、フリードマンは眼を向けている。スタハノフ運動家や冶金工場で高熱作業に従う労働者には、一般に上級カテゴリーの3倍～4倍の賃金が払われている。これとは反対に非専門的な職業の賃金は低くおさえられている。そこにみられるのは、資格を要しない労働への不信であり、また都市へ流入してくる農村青年を工業へ、専門職業へと誘導しようという政策であり、これは鉄道運賃を引き上げ「流動性」をおさえる政策で補完されている⁹⁵⁾。

労働者の賃金の格差の政策のことはフリードマンには十分理解できる。しかし、党派に与せずものごとを直視するこの社会学者には、どうにも理解できないことがあったのだ。そのひとつは、「創造的労働者」にたいして特別の恩典があたえられていることである。責任ある地位にいる技術者、科学者、作家、映画監督、俳優、こういった人びとは1,500～2,000ルーブルあるいはそれ以上の月収を得ていて、コミュニスト的であるというよりは、ブルジョワ的にふるまっている。「有名な映画監督のうちには年間で8万～10万ルーブルもらっている人びとがいるし、よく読まれている作家は容易に月1万ルーブルの収入を得る。新聞へのひとつの論説でさえ200～300ルーブルになるし、フランスの本で16頁分について平均500ルーブル払われている」。フリードマンがおかしいと思っただけではない。ソヴィエトの平均の労働者や農民の生活とあまりにもへだたりすぎている作家たちの有りようは、ソヴィエトの普通の人びとにも行きすぎと思われている。それゆえ、この矛盾は、時折の作家の粛清という反動の形をとってあらわれる。1937年4月のソヴィエトの作家アヴェルバック＝キルション批判を、フリードマンはそのようなものと理解している⁹⁶⁾。

これらのことの全体をどう考えればいいのか。スターリンは1935年4月のある演説のなかで、ソヴィエトの生活のすべての分野において、すべてがかかっているのは中堅幹部（cadres）となる人びとの育成であることを強調した。フリードマンには、そのためにこれらカードルにより多くの配慮を払い多くの賃金を払うような政策がとられていることは理解できる。しかし、そこでの格差の大きさにかれはとまどいを隠さない。「根底において正しいと思われるこの政策は、つねにあらゆるところで、必要な慎重さをともなって実行されて

いるであろうか。今日この政策は行き過ぎたところまで進められているのではないだろうか。物質的・精神的に、社会主義そのものにたいしてさえ危険なものとなっているのではないか。この間にこたえるには尚早であろう。しかし、10月革命を達成した偉大な国の現実の状況について熟知しようというソヴィエトの友人たちは、この間を提起せずにはいられない」⁹⁷⁾。

フリードマンにとって、どうにも理解できないもうひとつのことは、「数年の不在ののち、1935—36年ごろにソヴィエトにもどった人びとには、だれにでもはっきりと印象づけられるひとつの事実」、スターリンにかんする個人崇拜である。あらゆる場所にかけられているスターリンの肖像、「プラウダ」、「イズヴェスチャ」を初めとする新聞は毎日、スターリンをたたえる熱い表現でいっぱいである。工場労働者、パイロット、コルホーズ員、技術者、科学者、スポーツ選手、音楽家、チェス棋士など、すべてかれらを保護してくれるこの全能の人物に感謝し、その努力と成功とをきさげている。フリードマンは、このような称讃の波はスターリン個人にとっても十分すぎるであろうし、いつかかれ自身でこの波の高まりをおさえる日がくるであろうと思っていた。だが、事態の進行はフリードマンの予想とはちがった。その結果は重大であり、ソヴィエトの外でも大きな反響を生じさせている。そこでフリードマンは「10月革命の継承者であり、マルクス=レーニン主義に支えられているこの体制に、個人独裁というそれとは疎遠なはずの外観をとらせている理由はなんであろうか」⁹⁸⁾と問うのである。

詩人のシャルル・ヴィルドラックは、すでにひとつの説明をあたえていた。ロシアの地では人びとはアイコンとともに暮らしていたことを思え。いまのところ、それに対置する新しい精神の教育を欠いているのだから、古いアイコンを新しいそれと置きかえることが必要なのだ。そのうちに、党がアイコンを必要としない時代がやってくるだろう、そう説明していた。フリードマンはそれをこえて、このことは一国のみで社会主義を建設することの論理的帰結なのだと考えている。「ロシアは、なお多くの要素を聖なるロシアのままで変化させないでいる。今日でも多くの攻撃的な敵に包囲されている。その党書記の人格のうちに、反対者にたいして、党の総路線をシンボル化し、広め、高揚させることは党の意思なのである」⁹⁹⁾。さらにまた、広大な領土に散らばる多種多様な1億7千万の人びとを結集するには、抽象的な理念や体制を軸とすることでは不可能で、生きた具体的な人物を中心とすることしかないからであろう。フリードマンにはスターリンの個人崇拜はどうにも理解しがたい。そして拒否したい事実であるけれど、にもかかわらず、聖なるロシアからソヴィエトへの移行の過程が必要とされているものとして、むりに納得しようと努めているのである。

フリードマンの『聖なるロシアからソヴィエトへ』はジイドの『ソヴィエト紀行』よりも、

はるかに深いソヴィエトへの理解と共感から書かれていることは、以上から知られるだろう。もちろん、党派に与することなく現実を直視しようとするフリードマンのペンの下でソヴィエトの現実への批判がないわけではない。しかし、その直視の努力こそがこの著作に共感をもたせ、ソヴィエトへの共感を支えさせるものであった。だが、1938年にこの著作があらわれたとき、フランスとソヴィエトの коммуニストたちにはフリードマンのこの姿勢は理解されず、逆にきびしい批判にさらされることになる。

「私は1930年から1936年にかけて、共産党員ではなかったが、その忠実なシンパサイザーであり、共産党と緊密に関係し、その支配下の組織の活動家であった。3回目のソヴィエト滞在のとき、第1回モスクワ裁判があり、私は激しく動揺したのであったが、そのときの数ヶ月間の訪ソからもどって、私は『聖なるロシアからソヴィエトへ』を書き、これは1938年3月に出版された。この本にはフランシス・ジュルダンが序文を書き、私が見たままのソヴィエトの現実を明らかにし擁護することにその大部分があてられた。けれどもそのあちこちに、体制の展開にたいする私の不安が表明され、また＜個人崇拜＞にかんする節も含まれていた。そのためフランス共産党はこの本を困惑をもって迎え、はじめは慎重に扱っていた（私はフランシス・ジュルダンにともなわれて、モーリス・トレーズと長時間対談した）。けれども、突然、1938年6月から、おそらくモスクワからの指令にもとづいて、『ユマニテ』をはじめ共産党の出版物は猛烈な攻撃を開始した。ロマン・ロラン、ポール・ランジュヴェン、アンリ・ワロンらの支持もききいれられなかった。そして私のシンパサイザーとしての活動も終りをつげた」¹⁰⁰⁾。『聖なるロシアからソヴィエトへ』を著わしてから30年ののちになって、批判をうけるに至った経緯をフリードマンはこのように記している。「聖なるロシア」を背景としているところで、そこでの新しい社会を建設しようという努力に共感を示しつつも、望ましい社会主義を期待することは不条理であると論じるフリードマンの著作は、 коммуニストたちの宣伝するソヴィエト称讃の言葉に異和感をおぼえる青年たちや穏やかな左翼の人びとに、とくに訴えるものをもっていたのである¹⁰¹⁾。そしてこの訴えかけをうけとめた人びとのうちには、アメリカとソヴィエトという二つの新しい社会にたいして、決して政治的な意味ではなく、経済における主意主義と、科学と技術にたいして認めている大きな役割ゆえに、モダニズム的共感を示したリュシアン・フェーヴルとマルク・ブロックのような『経済社会史年報』を拠りどころとしてフランスの社会科学をつくり出す運動を進めている人びともいて、かれらは積極的にフリードマンを迎え入れたのである¹⁰²⁾。それゆえ、 коммуニストの眼からみれば、D.コートのように、フリードマンの政治的立場が明らかであったゆえに『聖なるロシアからソヴィエトへ』はジイドの『ソヴィエト紀行』よりはるかに危険なものと思われたのであろう。

6. 労働社会学の体系化

フリードマンは1935年から1939年にかけてパリにあるブール技術学校 (École Boulle) で教えていた。この時期のフランスでは、ジャン・ゼイの提案にかかる教育改革がさかんに論じられていたことは他でも書いたが、この学校もその改革の思想にそってつくられていた。すなわち、この学校はタピスリー織布、木細工、金属彫版などの職業に将来づくりや段階の生徒を対象としているのであるが、ここでは専門知識と一般教養を結びつけて教えていたのである。フリードマンが3度目のソヴィエト滞在を行い、また『聖なるロシアからソヴィエトへ』を著わすのはこの学校で教えていた時期のことである。

1939年に第二次大戦が始るとフリードマンは将校として動員される。「奇妙な戦争」のあとフランスは敗北し、対独講和の成立で動員を解除されると、フリードマンはトゥールーズ地区に移り、そこでレジスタンス活動に従っている。レジスタンス運動のなかでのかれの地位はかなり重要なものであったようで、戦後になってからレジスタンス勲章が授与されているし、技術教育視学総監の地位についたりしている¹⁰³⁾。

話を社会学者としてのフリードマンの活動へもどそう。かれの主著であり、初めて労働社会学の体系を試みた『産業機械化における人間の問題』は戦争の終った翌年の1946年に公開された。この著作はもうひとつの著作『スピノザとライブニッツ』とあわせ、翌1947年に学位請求論文としてソルボンヌに提出されている。

ところで、『産業機械化における人間の問題』はフランスのアカデミーの世界でひとつの新しい時代を画することになる。「1946年に刊行されたこの著作はフランスでは非常に新鮮なものであった。というのは、フランスの大学では、現代の労働問題はとりくむに値するものであるとは思われなかったし、とくにそれが労働者の労働であるばあい、このテーマはおそらく、フランスの大学の偉大な人びとにはあまりにも卑近なものであったろう」¹⁰⁴⁾。この著書はまだエコール・ノルマルの学生であったアラン・トゥーレーヌに強い影響をあたえ、その針路を決定させることになるし、また哲学者のジョルジュ・カンギレームにすばらしい書評を書かせることになる。このことはフリードマンによってよく考えぬかれたこの著作の構成とかかわっているにちがいない。

その意図についていえば、フリードマンがこの著作で示そうとしているのは『進歩の危機』でのテイラー主義、フォード主義の批判とはほぼ同じといいいい。そこでは、合理化により実現される機械と労働力の様式をもって効率の進歩と考えられ、産業における効率の進歩だけで社会的進歩が達成されると考える技術者の思考の抽象性から生じるひとつの錯覚が批判されていたであろう。その立場は『人間の問題』でもうけつがれる。だがそれだけでは

ない。「技術者主義」の抽象性の批判は、西欧各国で研究の進められている労働生理学、心理技術学 (psychotechnologie)、心理学、社会学などすべての専門家の視点を結びつけ、判断させるというやり方でなされるのである。このような方法が採用されてみると、労働する人間は、ひとつの学問のみでとらえようとする立場・姿勢から逃れ去り、他の学問の視点を必要とさせる。そして、人間的要素、社会的要素の作用をめぐって、ひとつの弁証法的な運動とでもいいうる展開が生じてくるようにみえる。だが、そのように展開させてみせるところにこそフリードマンによる労働社会学の体系が構想されているのである。このことはまた、労働心理学、心理技術学、心理学、社会学において明らかにされた結果すべてを、ユマニストの思想から出てくる考察と一致させていこうとするフリードマンの立場と深く結びついていいることも、見落されてはならない。他でもふれておいたように、1930年代のフリードマンは歴史学者のリュシアン・フェーヴルとの交流を通じて、ユマニズムの思想に深く影響されているのだ¹⁰⁵⁾。『進歩の危機』では「技術者の視点」の抽象性が指摘され批判されただけであったが、ここではそれのみで普遍的かつ体系的なものであるゆえに人間の問題をも合理的に扱うことができると称する科学主義、技術者主義からユマニズムを解放しようという立場がはっきりとうち出されている。「労働者」ではなく「労働する人間」という現実のすべての次元において、ひとつの原理に立って完全に合理的に把握することなどできない。そこでは多くの視点からの総合が要請されるというのである。テイラー主義によって観念されていた合理性を想起してみればよい。そこでは最終的にはその合理性によって奴隷化された人間をつくり出すことになり、人間において理性が実現するということにはならない。テイラーの企てにおいては、人間は機械と正確に連動させることのできるひとつの機械であると前提されていたし、人間の環境にたいする関心と反応についても、人間は「アメとムチ」の刺激しか知らない単純な存在であると前提されていた。工学の原理、あるいはテイラーの特殊な人間観が現実のあらゆる側面で妥当すると考えることから、さまざまな不条理が生じたのである。その不条理をこえるにはどうするか。『人間の問題』で展開されることはこれである。労働する人間へのアプローチにおいて、分析的かつ機械的な態度にしがみつくのをやめること、他の諸科学の視点とつきあわせて総合的に考えていかなければならないとフリードマンは論じるのである。そのばあいのかれの立場は決して分析を蔑視するというのではなくて、分析の理性についても、ユマニズム的な価値についても、各々に独自の意味を認めるという立場である。だが、最終的には人間労働の問題はユマニズムの価値が科学を導き統合するという方向でフリードマンは考えていよう。

それでは『人間の問題』において、「合理化」と労働する人間を扱う人間科学はフリードマンにはどのように検討されるのだろうか。この著作の全体の構成にそって、かんたんにみておこう。全体は、第1部「人間的要素」、第2部「人間的要素の限界」、第3部「企業の社

会心理学へ」の三つの部分から構成されている。

その第1部において、フリードマンはテイラー主義にみられるように人間を単純に機械に従わせ、人間と機械とを厳密に数量的に扱おうとする技術家的な視点が、労働の生理学や当時心理技術学とよばれていたものによって、どのように批判されていくかをあとづける。初期の心理学はテストされたデータを集めることに終始していた。しかし、統計的なデータはいくら豊富になっても個人をとらえることはできない。産業における心理学はゲシュタルト心理学その他の影響をうけることによって個人をより正確に観察する方向へと修正され、個人は「ひとつの全体を構成している人格」として考えられる。人格はひとつの要因だけをそこから恣意的にとり出すことのできない内的組成をもつものと考えられ、心理学の視点と方法は柔軟かつささいなニュアンスをもとらえるものとなる。機械的な動作を行う「労働者」ではなく「労働する人間」が問題となり、個人にとっての意味や満足の問題がとりあげられるようになる¹⁰⁶⁾。このような見方に立つなら、テイラーのこのような作業動作の分析やストップウォッチ測定の方法が科学的といえるものかは直ちに問われよう。「ひとりの人間の全体の動作が問題ということになるなら、要素的動作に分解し、不要なものを除外し、そこで有用なもののみをとり出し、その最短化をはかるなどということは合理的とはいえないことになる。無駄な動作の時間 (temps morts) はそれなりに意味をもつし、他の動作への移行の時間も必要となる。テイラーの方法を厳格に実施しようとするなら、労働者にたいして生理的・心理的に有害な労働条件をつくり出してしまうことになる」¹⁰⁷⁾。このような理解がエドガー・アツラーのような労働生理学者たちのもとで生れてくる。人間の労働過程は非機械的なものであることをアツラーは強調し、それは人間という動力の特殊な性質にあわせ組織されねばならないこと、すなわち労働動作の「最短の経路」のうえにはなく、「より快適な経路」のうえに求められるべきことを主張したのである。そして「より快適な経路」のモデルをつくることは機械を担当する技術者ではなく生理学者であることを主張したので¹⁰⁸⁾。

ここで労働の生理学者たちにより指摘されたことは、「人間労働の科学」を自称したテイラー主義もまさしく人間が非機械的な存在であることゆえに、「人間的要素」によって抵抗され障害と出会うということであった。こうして、労働生理学は普遍的な合理性を称したテイラー主義といえども除外することのできない「人間的要素」の存在を先ず明らかにし、それを個人の能力や適性の問題としてとりあげていった¹⁰⁹⁾。

フリードマンが『人間の問題』の第二部でとりあげるのは、生理学者と心理技術者がその研究のうちで人間的要素の存在をみるのであるが、それを客観的にとらえようとする、それはかれらの研究領域の外へと逃れ去ってしまう、ということである。合理化された工場のベルト・コンベアの流れに沿ったひとつの作業部署で一日に何百回と同じ作業を行う労働者

は、その仕事に「単調さ」を感じる。この単調感が作業能率を規定する人間的要素のひとつであることは明らかである。だが、心理技術学者がこの「労働の単調さ」の程度を測定しようとする、同一の作業がある人間にとっては単調であるが他の人間にとってはそうでない、あるいは同一の人間においてさえ、ある日には単調感をもつが別の日にはそれが感じられない、などということがすぐに明らかになる¹¹⁰⁾。なぜこのようになるかといえば、人間的要素なるものは一個人としての「労働する人間」の存在だけに依存していないからだ、フリードマンは考える。それは一個人をこえて産業の環境を構成する多くの要素に、そのうちでもとくに実行されている作業と結びついている価値に依存している。「この価値という回路を通じて、精神的・モラル・社会的な現実の流れ出るのである」¹¹¹⁾。ところで、実行している作業や仕事の意味や価値を規定しているのは、一個人の特性や選択であろうか。それもあるだろうが、その意味や価値は社会的に規定されているもの、社会的要因でないだろうか。

「単調感」の分析と同じことをフリードマンは、疲労や休息の効果についての生理学者や心理技術学者たちの研究を検討しつつ明らかにしている。もちろん、疲労にしても休息にしても生理的要因に基礎を置いていないわけではないが、それに還元することもできない社会的要因を含んでいる。しかし、生理学者や心理技術学者は人間的要素が個人の存在において決定されていると考えるから、この社会的要素はかれらの方法からは逃れてしまうのである。

それでは、「労働する人間」の能率の変化が社会的な要因によって規定されるという立場から行われている研究はどうなのだろうか。社会学においては、アメリカで1927年から13年間にわたって行われたエルトン・メイヨーらのウェスタン・エレクトリック社のホーソン工場での実験とそこから展開される人間関係論はよく知られている。フリードマンが第三部でとりあげるのも、メイヨーらの調査研究である。

ホーソン工場の実験においてメイヨーは、この工場の労働者たちの能率を支配しているものが採光や換気その他といった快適な労働を行うための物理的な環境ではなく、うちとけた仲間、くつろいだ雰囲気、コントロールの緩やかさ、全体についての理解など、工場内での人間関係において好ましい環境が形成されているかどうかであることを示した。すなわち、能率を支配しているものが社会的要因であることを示した。経済的刺激についても、テイラーの考えたように個人の願望に直接に作用しているのではなく、他の要素と結びついて影響を及ぼす。したがって、労働者のモラル、社会的態度を考慮しないわけにはいかない。いいかえると、労働者と仕事のつながり、作業グループ、作業場、工場、工場外の状況、家族などに、労働者がどれほど統合されているかが労働者のモラルを決定し、能率を決定する。メイヨーらの人間関係論の基本的なテーゼはこのようなものである。

フリードマンがそれをあとづけ、要約していないわけではない。しかし、かれはもう少し独自の見方でみている。ホーソン実験を行った社会学者たちが意識せずに前提している立場

に眼を向けている。人間関係論が、個人はある人間集団に包摂され統合されるとき個人のモラルも高まるというとき、産業社会の進化の方向について、かれらの見方が表明されているというのである。近代以前の社会において職人やギルドの組合員たちは労働慣行、職業・技術的な教養、伝統、人間関係、価値、ヒエラルヒーの感情などに浸され社会や職業集団に統合されていた。メイヨーらは、そこでの人間の行動はコストの論理にも効率の論理にも従ってはいない。そうではなく感情の論理に従っているという意味で「非論理的」であるといっていた。メイヨーらによれば、産業革命から現代の合理化に至るまで近代的産業の内部で生じている変化は、非論理的なものから論理的なものへの移行に他ならないのである。この移行の過程において、前近代社会の伝統や職業的教養や仕事の感情などは解体されていく。それゆえ、テイラー主義をはじめとする合理化は労働者がそれまで保存していた「非論理的行動」を解体しているが、それにかわる拠り所をあたえていない。新しい作業様式や能率の論理を押しつけるたびごとに、労働者の抵抗と出会うのはこのためである。「巨大工場にみられるモラルの低下、心理的葛藤は論理的行動を前提とする合理化されたシステムを画一的に押しつけたことに起因する」、メイヨーらはこう考える。こう理解されるなら、その対策も明らかになってこよう。「人間をある型におしこめようとする 効率の論理が惹起する拘束と葛藤とを避け、心理的かつ社会的に人間的要素への理解をもち、企業を多くの人間からなるひとつの社会システムとして回復すること」。こうして、人間関係論をとらえる社会学者たちは企業の労働者たちのあいだに「団体の精神」(esprit de corps)を発展させる方法を考えるに至る。具体的には個人ごとの関心に応じて、趣味、社交、スポーツ、映画などの集りをもつことである。この集りにおいて企業や工場での位置、教養、社会的出自をこえてのひとびとの出会いが可能となり、感情の論理によるあらたな相互的な人間関係が生れる。そこで職制と労働者とのあいだで認められる紛争はスポーツ・ゲームのうちに移され、解消されるというわけなのだ。こうして労働の場と時間の外部で満足があたえられ、企業への一体感が生み出され、それは能率の向上へとつながると理解されているのだ¹¹⁹⁾。

ここで、労働の能率を規定するものとしての社会的要因はたしかにとらえられている。しかし、メイヨーらのとらえ方で十分であろうか、とフリードマンは問うのである。ホーソン実験の研究者たちも企業の内部で、集団ごとの、あるいはクリークごとの対立があることを認めている。しかし、メイヨーらはそれはあくまでも企業内のこと考え、そこで原因と解決とを求めている。かれらの観察は、対立が企業をこえより大きな背景をもつばあいでは、そのことを認識しない。だが、集団ごとの対立、クリークごとの対立は、労働者の行動の深部に原因をもつものでないのか。経営者にたいし、労働者たちがかれらの経済的条件を集団的に防衛するところから生じてくるのでないか。そうであるとするなら、人間関係論の社会学者のいうのと反対に、集団やクリークの対立を、企業という地平をこえるひろがり

をもつ社会・経済的要因（社会階級）とかかわることに眼をむけねばならぬことになる。フリードマンはそう考える。企業内での集団やクリークの対立が能率の低下の原因であるとしたら、能率を規定する社会的要因はホーソン実験を行った社会学者たちの前提しているような一企業を単位とする社会システムの範囲をこえるものということになる。ひとつの企業のうちでの労働者の意識や態度の分化は、企業の内部だけに原因をもつだけではないのだ¹¹³⁾。

フリードマンはこのように、労働生理学、心理技術学、企業の社会学という三つの段階において「労働する人間」を扱う人間諸科学を検討した。そして、各々の立場なりの仕方では、人間を科学的労働組織や合理化のもとに組み入れようと企てられ試みられるたびごとに、その企図が、人間の生理的な抵抗、心理的な抵抗、社会的な抵抗と出会うことを示したのである。あるいはカンギレームのいうように、「所与の対象は、労働する人間についての認識が弁証法的に進歩するたびに、各々の段階において、客観的に扱おうとする科学の方法にたいして、主観的なものとしてあらわれる」ということもできよう。「要するに、主観的なものは、それを否定しようという各々の次元のうえで再び出現する。主観的なものは、より単純でそれをとらえやすいと思われていた次元において、客観的な方法に障害となり、分析的抽象をこえてしまう」¹¹⁴⁾。

なぜ、人間的要素は労働生理学や心理技術学の方法をこえてしまい、社会的要素は企業の社会学者たちの方法をこえてしまうのだろうか。フリードマンの考えるところでは、人間的要素、社会的要素といわれているものは、最終的には労働する人間が自分の仕事に認めている価値、もっと正確にいうなら、個々の断片化された作業について基準をあたえている、評価の基準としての価値とかかわっているからなのである。価値はすべての基準がそこに依存している最終の準拠なのだ。

こう説明するだけでは抽象的にすぎよう。「ベルト・コンベア化された作業について生理学および心理技術学的な詳細な分析は、それ自身において、先ず第1に技術的事実を示し、技術的事実を通じて心理的事実を示し、心理的事実を通じて社会的事実を示す」¹¹⁵⁾とフリードマンはいつていた。フリードマンのいう社会的事実、社会的要因は一見したところはっきりとは示されていない、あるいは企業をこえて社会のうちにある諸集団の規定をうけることでしかないとも思われよう。しかし、それはフリードマンが説明しようとするのではない。フリードマンの語りたことは、かれがマックス・ウェーバーの「産業労働の物理心理学」（1908）を論じている部分から読みとれる。ウェーバーはドイツの工場の調査から、合理化が大工場において導入された結果、労働者のもとで緩怠が多く発生していることに注目した。しかし、緩怠の発生を労働組合の責任に帰すのは、ウェーバーによれば表面的である。ウェー

ーバーは緩急が合理化の行き過ぎに対抗する手段として採用されていることに注目したのである¹¹⁶⁾。フリードマンによるなら、これは「工場の生活の科学的考察は、労働者にイニシャティヴの余地をあたえないこと、自主性の抑圧、工程編成への参加機会のないこと、これが合理化にたいする抵抗の主要な原因であることを示している」。つまりフリードマンのいう価値とは、労働者のイニシャティヴ、自立、労働条件の決定への参加などについての、労働者の選択に他ならない。フリードマンのばあい、労働者のもとの価値は決定されつくしているのでなく「自由」とされている。そのかぎりマルクスの『資本論』での労働過程論での人間労働についての理解と近いものといえる。

しかし、フリードマンによってこの「自由」の実現はどのようにして可能となると考えられているのだろうか。『聖なるロシアからソヴィエトへ』をめぐってコミュニストとは袂を別ったとはいえ、レジスタンスの活動家であったフリードマンは左翼の人間である。「その生理的能力に応じた効率を完全に発揮しうる労働者たちが、その能力を実現するにあたって、すなわち、科学的に編成された現代の労働システムに統合されるにあたって障害となっているのは、経済の資本主義的構造である」と考えているのだ。コミュニストの同伴者ではもはやなくなっているとしても、社会主義のもとでこそ人間労働はその創意と能力を自由に発揮しうるという『ソヴィエトと資本主義諸国における機械化の問題』(1934)での思想はここでも存続していよう。しかし、そのニュアンスは同じではない。『ソヴィエトと資本主義諸国における機械化の問題』と『進歩の危機』では、フリードマンはテイラー主義と合理化を「絶対技術」としてとらえる立場を完全に否定しることができないうちにいた。そのことはテイラーとフォードの二人を、18世紀の啓蒙思想家以来の進歩の思想の最後に位置づけていることから知られる。テイラー主義ないしフォード主義そのものが非人間的なのではない。資本主義の社会体制のなかでそれが採用されるとき、利潤という目的にあわせ労働作業の基準が定められるとき、それらは非人間的なものになる。逆にベルトの速度など労働作業の基準の決定に労働者が決定する社会主義の体制のばあいには、「労働する人間」の能力は完全な形で開花させられ、創意も発揮されると考えられていたのはすでにみたとおりである。

しかし、現実存在する社会主義が、必ずしもフリードマンの予想していたような方向に進まないことをフリードマンは認識するようになる。『聖なるロシアからソヴィエトへ』のなかで、ソヴィエトの指導者がいずれは中欧のファシスト政権との戦争に入らなければならぬことを予想して軍備拡充を優先させることには、ごくわずかふれているにすぎなかった。しかし、フリードマンはのちの著作で書くように、工業化のうちで軍備を優先させる政策のなかで、1930年代初めにかねがみたような労働作業の基準を人間的なそれにあわせ決定することが犠牲にされるのをみていたし、ソヴィエトの心理技術学者スピールレインが追放されたことも知っていたのである¹¹⁷⁾。『聖なるロシアからソヴィエトへ』はこれらの事件を思い

浮べながら読むとき、フリードマンのソヴィエトの将来への不安がかなり色濃く影を落しているのがわかる。フリードマンがこのような屈折した問題意識をかかえていたときに、かれはリュシアン・フェーヴルとの親しい交流を通じてユマニズムの思想の影響を受ける。コミニズムからユマニズムへ移行したのだろうか。そうではない。フリードマンの思想の軌跡をたどってみるならわかるように、もともとユマニズム的な立場からコミニズムへ接近していくのであるが、それが再びユマニズムの立場にもどっていくのである。

現実のソヴィエトやマルクス主義にたいして不十分なものを感じ距離をおくが、かといってその批判者になるわけではなく、ごく穏和な社会主義の立場にとどまっている。フリードマンの『聖なるロシアからソヴィエトへ』以後の思想的立場をこのようにおさえておくなら、『人間の問題』において、人間労働と労働する人間を対象とする人間諸科学に沈潜することで到達した立場が社会主義のもとでこそ人間の創意がよく発揮されるというものであるにしても、そこでいわれている社会主義は現実のソヴィエトでもマルクス主義でもないことは理解されよう。しかし、逆に、それを積極的な形で示すこともできない。もしこういってよければ1970年代になってフランスに出現する「自主管理的社会主義」に近いものといえるかも知れない。人間科学に沈潜し、人間的要素、社会的要素、そして「労働する人間」の自由や価値を問題にするに至るなら、以前のようにテイラー主義や合理化が「絶対技術」であるなどとは考えられない。それは「労働する人間」の自由や価値にあわせ考え出され、採用され、改良されていく手段の体系ということになる。

このような思想的立場から問われることは、労働する人間が社会主義の体制のもとにいるか資本主義の体制下におかれているかということではない。それも考慮にいれられるべき要素であるが、労働する人間が、人間的要素や社会的要素において、具体的にどのような条件のもとに置かれているかを先ず第1に観察し理解することである。だから両大戦間期のスロヴァキアのツリン（現在のゴッドワルド市）にあったユニークな労働組織をもつ企業「バータ」(Bat'a) などに関心をもつのであるし¹¹⁸⁾、のちの『細分化された労働』¹¹⁹⁾においても職務内容の拡大の諸々の試みに関心を向けるようになる。しかし、現代労働の問題がフリードマンの問題意識とかみあうような形で提起されるのは、第4章の冒頭で書いたように1960年代末から西ヨーロッパ諸国であらわになった「テイラー主義の危機」以後のことなのである。だがこの時期に、晩年のフリードマンの関心は労働の問題からはなれてしまっていたのである。

ところで『産業機械化における人間の問題』は、「労働する人間」における人間的要素、社会的要素をどのようにとらえ、どのように理解すると同時に「人間的な基準」の決定とその意味の問題を考えることをもうひとつのねらいとしている。フリードマンは「自然環境」

と「技術環境」という概念の提唱者としてよく知られているわけだが、この概念は人間的な基準の問題ともかかわっているのである。

フリードマンが「新しい環境」ないし「技術環境」というのは、現代産業のなかで利用されている生産装置や機械の全体は、機械化以前の文明の環境にたいして、全くことなる環境をなしているとして、それをとりあえず名づけたものである。この環境のなかで人間は、それまで伝統社会で過していた自然環境においては決して経験することのない多様かつ多量の機械的刺激にさらされている。ところで、生物学者たちによれば一般的にいて、生物は諸々の物理的刺激の総体に他ならない物理環境のなかで生活しているが、決して個々の刺激にたいして反応しているのではなく、その刺激の総体にたいして反応している。じつは、技術環境における人間を考えるばあいのカギもここにある。労働環境への労働者の適応もそれと同じように考えられないだろうか。こう問題を立ててみるとすぐに重大な問題があらわれる。ワトソンやアルペール・ワイスらの行動主義者によると、環境のあまりに決定的な作用が生物の遺伝的構成や能力を無化してしまうことがあるというが、テイラー・システムのもとに置かれている労働者もこれと同じ状況にあるのではないか。人間労働を非生命的なメカニズムと連動させ人間の動作を機械のリズムに同化させるとき生じるのは人間の能力の無力化ではないだろうか。しかも、ここで、テイラー主義のもとでの機械のリズムや速度についてみれば、技術者の設計をその背後で規定している経済効率なるものは、その時点の景気変動であり、市場での競争なのである。

つまり、労働する人間——人間的要素——社会的要素という図式は、ここでは、社会・経済的環境→労働環境→労働者という形での規定関係にある。テイラー・システムのもとに置かれている労働者は刺激・機械的運動・社会経済的な強制などの総和に、個人的イニシャティヴをとり対応することはできない。さきの環境における生物体の反応ということでは、テイラー・システムのもとでの労働者の反応は不自然なものであるから、そこでの観察の結果から労働作業の基準をひき出すなどということはできないことが明らかになる。生物学者たち、行動学者たちは決してテイラーのように考えない。なるほど環境は要素としての諸々の刺激に分解しうるかもしれないが、生物はそのような個々の刺激にたいして反応しているのではなく、ひとつの複合体としてとらえられた環境にたいし反応している。その点についてカンギレームはこう表現している。「ひとつの環境のなかでの生物の諸々の運動は、個々の刺激にたいする反応としてよりも、生物の有機体が命じる欲求により規制されているものと考えられるべきである。それゆえ、生物の運動にとって欲求=意味が重要になってくる」¹²⁰⁾。

ところで、さきの生物学者たちによれば、自然な状態では、生物体にそなわっている傾性に従ってその生物が環境に働きかけるときにしか、環境はその生物体にある運動を強制しな

い。先に環境から強制されて生物体が生ずる反応は不自然な反応である。カンギレームはフリードマンの分析からひらける地平をもっと広げようとして、ユクスキルやゴルトシュタインの研究を援用している。生物の行動の環境は、生物体によって物理的環境においてなされるひとつの選択である。生物体に個有なこととは、それ自身の環境を自ら構成することであるとユクスキルとゴルトシュタインはいう。これをテイラー・システムにたいする労働者の反応とつきあわせてみよう。『人間の問題』が示しているように、アメリカでもフランスでも、工場にテイラー・システムが導入されるとき労働者たちはつねにはげしい抵抗を示した。それは、労働者からかつての職人的熟練の作業がもっていた *travail à l'unité* における自立性が奪われ、作業の基準を「外から」押しつけられることへの抵抗であった。カンギレームによって、フリードマンの立場がこのように明確にされてみると、テイラー・システムや合理化に反対する労働者の行動は自然な反応であることになる。そのみでなく労働者にとっての意味の選択とかかわらせるなら社会的防衛の反応であることになる。フリードマンがいうような、「諸々の観察は、労働者たちは、自分たちの従来の経験的に従ってきた動作の批判や合理的な動作の選択について心理的に参加している（ないしその印象をもつ）ていどにに応じて、動作の合理化に好意的に反応する」¹²¹⁾ことも、こうみてくると一貫して理解できよう。カンギレームによれば、「従来の動作の批判・検討や新しい合理的な動作の選択は、じつは労働者が労働の意味をとらえることであり、新しい環境へと自己を位置づけることに他ならない」¹²²⁾。いいかえれば「自ら環境に準拠し、それに反応すること」である。フリードマンの論じる「労働する人間」にひきつけていえば、これは、労働者はその環境にあって自ら主体と感じようとし、拘束された環境のなかで客体と感ずるのを拒否することに他ならない。

労働の基準の問題が提起されるのはこのパースペクティブにおいてである。テイラーは機械設計の基準となった能率にあわせて *one best way* を決定しようとしたが、基準となるのは人間である。しかし基準が人間の側に求められるべきであるとして、それはどのように定められるであろうか。ここで再び大きな問題があらわれる。生物学においては人為的に設定された条件のなかで得られた生物の行動を自然な正常なものとは認めがたいのは周知である。テイラーがベツレヘム・スチール社で鋼材運搬の実験に用いたシュミットについて、労働生理学者のアツラーは、シュミットのもとでは平均的な人間が日常的に持続することのできないエネルギー支出のみられることを示していた。テイラー的なやり方では、労働作業について人間的な基準は決して得られない。フリードマンによるなら、基準はただひとつでなく複数存在する。そして基準の多元性、基準を相対的なものと考えさせるものは、じつは価値が多面的であるという事実なのである。

そこからまた逆に、テイラーがひとつの絶対の基準を主張することができたのも、テイラ

ーは決して意識しなかったけれど、19世紀末アメリカ資本主義の離陸期に、多くの過剰な労働力が存在していたという事情に規定されている。それがテイラーの主張する能率を決定させていたのである。ホーソン実験でもこのことはいいうる。同僚のあいだでまた職制とのあいだに信頼しうる人間関係ができて達成さるべき仕事による拘束の感情がなくなるときに、能率は高まるとされていた。この実験室のなかでうちたてられた基準はどの程度まで工場・作業の環境へもちこむことができるのであろうか。ところで、社会的要因は工場や作業場をこえたところで規定されるものであった。とするなら、工場や作業場での基準の決定はどうなるのか。フリードマンは工場・作業場をこえる社会そのものの複合性に、そこでの価値の多元性に基準の決定を委ねようと考えているように思える。「生理的・心理的な次元のことが客観的に意味をもちうるために決定論とおきかえるべきはこの社会的複合体のなかにおいてである」¹²³⁾。ここでもフリードマンの結論は価値の多元性に委ねるということである。そしてこの立場が、さきにのべたように、社会主義が資本主義かということよりも、労働する人間のおかれている具体的な条件、環境を先ずみていこうという態度につながるのであろう。

これまでわが国の社会学者たちのもとで、ジョルジュ・フリードマンの社会学がとりあげられたのは、ここで論じた時期よりもっと後の著作である『労働はどこへ行く』と『細分化された労働』とを中心としてであった。この二著でフリードマンは個々の労働の環境での人間労働を具体的に観察し、そこでの問題を指摘し、職務内容の拡大というような方向を大まかに示していた。それ以前の著作でかれが取り組んでいた問題のことは殆んどふれていなかったのである。それゆえ、フリードマンがどれほど大きな問題に、どれほど遠く見通しうる視点に立って取り組んでいたかは十分に理解されないでいたように思える。しかし、かれの活動の中心的部分は両大戦間期のそれにあるのであり、その軌跡をとらえることがかれの社会学のパースペクティブの広さをおさえるためには決定的に重要なのである。

〔注〕

- 48) Claude DURAND, *Le travail enchainé, organisation du travail et domination sociale*, 1978, p. 7.
- 49) 今日、科学的労働組織やテイラー主義について熱心に研究されているのはこの理由による。
Cl. DURAND, R. LINHART の著作の他にも Benjamin CORIAT, *L'Atelier et le chronometre*, 1979 があるし、1981年に入ってから次のような新しい著作が出ている。
Bernard DORAY, *Le Taylorisme, une folie rationnelle*, Maudicéde Montmollin, *Un Taylorisme à visage humain*. Ch. DEJOURS, *Travail, usure mentale*.
- 50) Cl. DURAND, op. cit., p. 8.
- 51) Irene ALLIER et Kathleen EVIN, *Veut-on expulser les Imigrés?*, Le Nouvel Observateur, 8-14 décembre 1980.
- 52) Robert LINHART *Lénine, les paysans*, Taylor, 1976, p. 78. note 1.
- 53) Robert LINHART, op. cit., p. 78.
- 54) Georges FRIEDMANN, *La Crise du Progrès*, 1936, p. 70.

- 55) フリードマンのテクノクラシー論批判については、G. FRIEDMANN, *Les Technocraties et la civilisation technicienne*, repris dans G. GURVITCH, (éd.), *Industrialisme et Technocratie*, 1951. またミシェル・クロジエの *one best way* の批判はその多くの著作で行われているが、たとえば *La Société bloquée*, 1970. の第1部などを参照。
- 56) G. FRIEDMANN, *La Crise du Progrès*, p. 74.
- 57) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, p. 74.
- 58) F. W. TAYLOR, *Principe d'organisation scientifique* p. 102. (フリードマンからの孫びき)。
- 59) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, p. 77.
- 60) F. W. TAYLOR, *op. cit.*, p. 62.
- 61) F. W. TAYLOR, *op. cit.*, p. 102.
- 62) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, p. 79.
- 63) F. W. TAYLOR, *op. cit.*, p. 102.
- 64) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, p. 82.
- 65) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, p. 87.
- 66) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, p. 91.
- 67) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, p. 92.
- 68) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, p. 94.
- 69) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, p. 94.
- 70) Henry FORD, *Le Progrès*, 1930 p. 130.
- 71) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, p. 102.
- 72) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, p. 103.
- 73) 山田盛太郎, 『日本資本主義分析』, 1934. ここでは多機能的機械を操作する高い技術的教養をもつ労働者の度高な能力が、そのまま労働運動の指導の能力に転化すると想定されている。
- 74) Henry FORD, *op. cit.*, p. 130.
- 75) アンドレ・ジイド, 『ソヴィエト紀行修正』(堀口大学訳), 1938年。「あとがき」257頁。
- 76) André GIDE, *Retouche à mon retour de l'U.R.S.S.* 1934. (堀口大学訳, 130頁)。
- 77) David CAUTE, *Communism and the French Intellectuals, 1914-1960*, 1964, pp. 124-125.
- 78) David CAUTE, *op. cit.*, p. 125.
- 79) André GIDE, *Retour de l'U.R.S.S.* 1936, p. 39. (小松清訳, 27頁)。
- 80) André GIDE, *Retour de l'U.R.S.S.* 1936, pp. 42-43. (小松清訳, 30-31頁)。
- 81) Georges FRIEDMANN, *De la Sainte Russie à l'U.R.S.S.* 1938, pp. 245-246.
- 82) André GIDE, *Retour de l'U.R.S.S.* 1936, pp. 46-47. (小松清訳, 33-34頁)。
- 83) G. FRIEDMANN, *De la Sainte Russie à l'U.R.S.S.* 1938, p. 246.
- 84) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, pp. 249-250.
- 85) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, p. 250.
- 86) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, p. 255.
- 87) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, p. 46.
- 88) Lucien FEBVRE, "compte rendu de "De la Sainte Russie à l'U.R.S.S." dans *Annales. H. E. S.* no 10, 1938.
- 89) G. FRIEDMANN, *De la Sainte Russie à l'U.R.S.S.* 1938, p. 80.
- 90) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, p. 87.
- 91) 山田盛太郎, 『日本資本主義分析』, 2-3頁
- 92) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, pp. 89-91.
- 93) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, pp. 101-106.
- 94) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, p. 104.
- 95) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, pp. 112-117.
- 96) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, pp. 120-121.
- 97) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, pp. 122-123.
- 98) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, p. 216.
- 99) G. FRIEDMANN, *op. cit.*, p. 218.
- 100) Georges FRIEDMANN, *La Puissance et la sagesse*, 1970, p. 272. (note), (中岡哲郎・竹内成明訳, 『力と知恵』(下), 46頁)。

- 101) David CAUTE, *Communism and the French Intellectuals, 1914-1960*, 1964, p. 127. なお、当時は学生であったエドガール・モランは、ジイドの『ソヴィエト紀行』やフリードマンの『聖なるロシアからソヴィエト』が共産党の禁書であったことを証言している。しかし、モランによればこれら禁書である著作を読んだゆえにコミュニストになった青年たちも存在したのだ。Edgar MORIN, *L'Autocritique*, 1959, p. 34.
- 102) André BURGUIERE, *Histoire d'une histoire: naissance des Annales*, *Les Annales* 1929-1979, dans *Annales S. E. C.* 34e année, no. 6, 1979, pp. 1356-1357.
- 103) Marie-Thérèse BASSE, *Biographie de Georges FRIEDMANN*, repris dans, *Une Nouvelle Civilisation ?* (1973) pp. 475-476.
- 104) Alain TOURAINE, *Un désir d'Histoire*, 1977, p. 44. (『歴史への希望』, 1979, 39頁)
- 105) 『産業機械化における人間の問題』が心理学者のアンリ・ワロン、社会学者のモーリス・アルプヴァックとともに歴史学者であるリュシアン・フェーヴルに献げられていることから、それはうかがわれる。
- 106) G. FRIEDMANN, *Problèmes humains du machinisme industriel*, 1946, pp. 40-42.
- 107) G. FRIEDMANN, op. cit., pp. 45-46.
- 108) G. FRIEDMANN, op. cit., p. 47.
- 109) G. FRIEDMANN, op. cit., pp. 57-58.
- 110) G. FRIEDMANN, op. cit., pp. 121-149.
- 111) G. FRIEDMANN, op. cit., p. 355.
- 112) G. FRIEDMANN, op. cit., pp. 310-315.
- 113) G. FRIEDMANN, op. cit., pp. 315-319.
- 114) Georges CANGUILHEM, *Milieu et Norme de l'Homme au Travail*, *Année Sociologique* (1946), p. 123.
- 115) G. FRIEDMANN, op. cit., p. 357.
- 116) G. FRIEDMANN, op. cit., pp. 276-277.
- 117) G. FRIEDMANN, *Où va le travail humain?*, 1950, pp. 260-261.
- 118) G. FRIEDMANN, *Problèmes humains du machinisme industriel*, 1946, pp. 319-324.
- 119) G. FRIEDMANN, *Le Travail en miette*, 1956, pp. 109-128.
- 120) Georges CANGUILHEM, op. cit., p. 128.
- 121) G. G. FRIEDMANN, *Problèmes humains du machinisme industriel*, 1946, p. 271.
- 122) G. CANGUILHEM, op. cit., p. 129.
- 123) G. FRIEDMANN, op. cit., p. 299.

L'ITINÉRAIRE INTELLECTUEL D'UN SOCIOLOGUE DES ANNÉES 1930, GEORGES FRIEDMANN ET SES TRAVAUX (II)

Mitsunobu SUGIYAMA

Au XIXe siècle, autour de la fixation de la réglementation de la journée de travail, se trouvèrent deux mouvements opposés l'un à l'autre. D'une part, les capitalistes voulurent prolonger la journée de travail au maximum, d'autre part la classe ouvrière chercha à réduire le temps de travail plus court. A la fin de ce conflit, les gouvernements des pays de l'Europe de l'ouest ont décidé au milieu du XIXe siècle réglementation de la journée de travail dans les industries.

Marx a dit, dans "Le Capital", que cette évolution était la première réaction consciente de la société dans laquelle elle est intervenue au processus spontané du développement social du travail.

Quelques marxistes japonais tel que Yoshihiko UCHIDA, essayent d'expliquer cette évolution sociale à la façon toute nouvelle. D'après eux, c'est le mouvement ouvrier qui accomplit le passage de la production de la plus-value absolue à la production de la plus-value relative. Les capitalistes sont obligés à accroître la productivité du travail en employant de nouvelles machines, de méthodes de travail plus rationnelles à cause du mouvement ouvrier. Au XIXe siècle, la classe ouvrière avait fait preuve de sa puissance.

Cependant, dès que naît le système taylorien, l'effort contre-attaque des capitalistes se traduit par l'adoption de l'organisation scientifique du travail. C'est à ce problème que Georges Friedmann s'intéressait au début de son étude sociologique. A cette époque, c'est-à-dire les années 1930, comme son ami Paul Nizan, il était communiste.

Aux yeux de ce jeune sociologue, définir sa position à ce problème de la rationalisation était un peu compliqué et embarrassant. Bien que l'organisation scientifique du travail soit un des moyens capitalistes de l'exploitation, Lenine a affirmé que, pour établir une nouvelle société socialiste en l' U.R.S.S., il fallait adopter le système taylorien.

Dans cet article, en examinant les travaux tels que "Problèmes du machinisme en l' U.R. S. S. et dans les pays capitalistes", "la Crise du Progrès" et "De la Sainte Russie à l' U. R. S. S.", j'ai essayé de suivre l'itinéraire intellectuel de Georges Friedmann.